
その歌を

うわの空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その歌を

【Nコード】

N2856Y

【作者名】

うわの空

【あらすじ】

独りで生きていくために、身体を売り続ける『私』。
そんな彼女の腕を掴んだのは、見覚えのない青年だった。

「俺は覚えてるよ。君のことも、約束のことも」

少しずつ変わっていく彼女と、いつまでも変わらない彼の物語。

泣いていた私のために、彼がうたってくれたあの歌を。
ずっとうたい続けてくれた、その歌を。

――私は。

大きく息を吸い込んでから、私はゆっくりとうたいはじめた。
私の声は彼よりも高いし、うたうのが特別上手いというわけでもないけれど。

私はうたう。

耳に残っている彼の声に、今は聞こえない彼の声に、合わせるようにして。

「君が笑ってくれるから、僕はうたうんだ。君の姿が見えなくても、ずっと、ずっと。僕は今日もうたい続ける。この声が、いつか君に届けば、それでいい」

彼のために、私は今日もその歌を、うたう。

1

夜の繁華街は眩しくて、冷たい。

たくさんの人がいるはずなのに、たくさんの人が笑ってるはずなのに、なんでこんなにも空っぽな感じがするんだろう。

私は電灯の下にひっそりと立って、息を殺していた。

誰にも見つからないように。

そして、誰かに見つけてもらえるように。

「君、終電逃しちゃったの？」

酒臭い親父が声をかけてきて、内心で私は笑った。今日はハズレだな、と思う。はげあたま禿頭に視線をやらないように注意しながら、私はほほ笑んだ。

私が終電を逃したのかどうかなんて、こいつは心配してない。こいつが心配してるのは、『私の身体の値段』だ。

「……おじさん、ホテル代頂けませんか？　できれば朝ご飯のお金もくれると嬉しいんですけど」

ラブホテル一泊分、プラス千円程度。

それが私の値段だ。

汚い私の身体なんて、このくらいの安さでちょうどいい。

お金を頂けませんか？　と言われて、はいそうですかとタダで金をくれる男なんていない。それはもはや暗黙の了解で、向こうは嬉

しそうにうなずいた。

「分かった。じゃあ行こうか」

私は頷いて、相手の手を握る。……手汗が酷い。そしてやつぱり酒臭い。本当に今日はハズレを引いたなと、内心で苦笑した。

妻が待つてゐるからと言い残して、禿頭はそそくさと帰っていった。――しかし、やることだけはちゃんとやっていくんだな、愛しの妻が待つてゐるくせに。

私は鼻で笑ってから、シャワーを浴びるためにベッドから立ち上がった。全身に禿頭の息がかかつてゐるみたいで、気持ち悪かった。

身体を売つてゐるのは、そういう行為が好きだから。というわけではない。私はむしろ、男もセックスも大嫌いだった。売れるものがあるから売つてゐるだけで、好きこのんでやつてゐるわけではない。しかし、そこら辺を結構勘違いされやすい。こっちがちよつと嬌声をあげただけで、男は色々勘違いする。……ビジネスだから相手が喜びそうなことをやつてゐるだけで、こっちは気持ちいいだなんて思つてゐないのに。

間抜けな奴らだと思ひながら、私はシャワーの栓をひねった。

十五の時に家を出てから約四年。その間、ずっと変わらないこのスタイル。我ながら、よく続けているなあとと思う。たまに羽振りのいい客が万札を落として行つてくれるので、そういう時は安い漫画喫茶なんかで寝泊まりする。金がなくなれば、やる。そうやつて今日まで一人で生き延びてきた。きつと、これからも。

私はシャワーを浴び終わると、禿頭がテーブルの上に置いていた金を確認した。

……五百円。

「遠足のおやつか」

私は笑った。いろんな意味で最悪の客だった。

翌朝、ファーストフード店で腹ごしらえすると、私は駅前に向かって歩き始めた。今日は常連客と会う約束の日だ。一見真面目なサラリーマンに見える七三分けのおじさんは、服を買ってくれたり小遣いを多めにくれたり、かなり羽振りが良かった。多分、どこかの偉いさんなんだろうと思う。まあ、相手がどんな仕事をしていようが私には関係ない。固定客はあまり作りたくなかったけれど、太っ腹なおじさんは大歓迎だった。会うのは二週間に一回程度だから、あまり負担にもならないし。

……ただ、相手の性癖がちょっとアレなだけで。

「あ、待って！」

「え？」

後ろからいきなり腕を掴まれて、私は振り返った。背後にはギタ
ーらしきものを背負った若者……というか、私と同一年くらいの男

が立っていた。身長は百七十五センチほど。短い黒髪は、あちこちにはねている。肌は白く、若干垂れ目で鼻が高い。

……地味にモテそうな顔だ。ただし、『地味に』。

「……なに？」

相手が敬語ではなかったので、私もため口で返す。男の恰好は、安物っぽい七分袖のデニムシャツに、これまた安っぽいベージュのズボン。——つまり彼は、金とはあまり縁がなさそうだった。

「よかった、やっと会えた。探してたんだ」

「探してた？ 私を？」

「最近、こちら辺にいただろ」

人違いじゃないの？ と言いたいのを堪えて、私は彼の顔をじろじろと見た。——やっぱり見覚えがない。彼を相手に『商売』をしたことがあったのだろうか。だとしたら、地味すぎて覚えていないのかもしれない。彼には悪いが。

黙りこくる私に気を遣っているのか、彼は爽やかな笑顔を無料で振りまいてくれている。しかしやはり、覚えがないものは思い出せない。私はため息をついた。

「……あのー」

「コーヒー飲まない？ おいしい店、知ってるんだけど」

——誘っているのかなんなのか、いまいちよく分からない。私は彼の黒い瞳を見据えて、言い放った。

「悪いけど、これから人と会う約束があるから。なんなら予約してくれてもいいよ。夜は空いてる」

「じゃ、夜に会ってくれる？」

コーヒーに誘ってきた時と変わらない表情で、彼は嬉しそうに言った。彼の笑顔は無邪気で、下心を感じない。シタゴコロ——私を予約するという意味を、分かっているんだろうか。

「……待ち合わせ場所は？」

予約してくれてもいいよと言ってしまったことを後悔しながら、私はため息交じりに尋ねた。彼は私の言葉を聞くと自分の後ろを見て、

「この先に大きな公園があるの、知ってる？ タコ公園」

そこに遊びに行こうよとはしゃぐ子供のような顔で、言ってきた。大きな蛸たこの遊具が目印となっている公園を思い浮かべながら、私はうなずく。

「あの公園の真ん中に、大きな噴水があるだろ。そこに来てほしいんだけど。夕方六時くらいまでならいるから」

「——分かった。じゃ、また後で」

とは言ったものの、面倒だと思った。今から少し疲れる仕事があるし、その仕事が終わったら、しばらく働かなくていいくらいのお金はもらえるはずだ。……こいつとの約束は無視してしまおうか。

そう思いつつ歩きだした私に、彼が叫んだ。

「君はもう、俺のこと忘れた？」

「え？」

私が振り返ると、先ほどと変わらない笑顔で彼がこちらを見ていた。

「俺は覚えてるよ。君のことも、約束のことも」

「――約束？」

私が訊き終わる前に、彼は公園へと向かって走り出した。

2

ギターを背負っていた彼のことを思い出そうと頭を捻ったものの、まったく記憶になかった。何かを約束した覚えもない。やっぱ人違いだったんじゃないだろうか。

「次は、二週間後の十一時に」

こうやって会う約束をする常連客は、いま私の目の前にいる七三分けのおじさんくらいのはずだ。

「分かった」

私はベッドの上から、ネクタイを締め直しているおじさんの後ろ姿を眺めた。おじさんの恰好はいつだってスーツだ。仕事に行く嘘についてここまで来ているのかもしれないし、このあと仕事なのかもしれない。そこら辺は訊いたことがないし、訊くつもりもなかった。

「それじゃ」

おじさんは私の方を振り返ろうともせず部屋から出ていった。私はため息をつく。今日のはいつもより酷かった。しかし、こういう日はお小遣いを多めにくれる。

テーブルの上に置かれた福沢諭吉を数えてみた。五人。つまり今日の報酬は五万円。

「まいど」

私は小さな声で呟き、それを財布に入れた。時刻は十六時過ぎ。九月に入り秋が近づいてきているせいか、日が沈むのが早くなっていた。

「……あと二時間か」

夕方六時くらいまで、と言っていた彼のことを思い出し、頭を掻いた。身体が痛いし、動くのも面倒だ。けれど、約束と言われたのが引っ掛かる。

これで人違いだったら二万円くらいせしめてやると思いながら、私はバスルームへと向かった。

夕方のタコ公園には、小学生くらいの子供が集まっていた。子供が嫌いな私は眉間にしわを寄せる。全力で自転車をこいでる子供も、転んで泣き叫んでいる子供も鬱陶しい。ついでに言うど、いちやついてるカップルが多いのも鬱陶しかった。タコ公園は、デートスポットとしても有名なのだ。

正面入り口から園内に入って、まっすぐ奥へと突き進む。彼が言っていた噴水は、この広いタコ公園のちょうど真ん中にあった。ちなみに、蛸たこを模した遊具は園内に二つある。その一つの前を通り過ぎながら、遊んでいる親子になんとなく目をやった。

小さな子どもが母親の方に向かって走る。抱きつく。親は受け止める。笑顔で。

その風景がやはり鬱陶しくて、私は舌打ちした。こんな公園を待

ち合わせ場所にした彼を、呪ってやりたい。

噴水前に近づくと、歌声が聞こえてきた。私は目を凝らして、顔ではなく服装を確認する。安物のデニムシャツ。あいつだ。

彼は噴水のそばで、ギターを弾きながら歌をうたっていた。ストリートライブってやつだ。彼の弾いているギターは、ロックで使われているようなカッコいいのじゃなくて、……ウクレレを大きくしたみたいなやつだった。楽器について詳しくない私は、そのギターの正式名称を知らなかった。

彼の周りには、五人くらいの人が集まっていた。それが多いのか少ないのかは分からない。けれどその中には、彼の歌声にうっとりとして聞き惚れている女性もいた。私はそんな観客の中に混ざるのが嫌で、近くにあったベンチに腰掛ける。彼が私の姿を見て、うたいながらほほ笑んでくるのが分かった。

この距離だと、歌詞はよく聞き取れない。けれど、メロディははっきりと聞こえてきた。

——何故か、聞き覚えのある曲だった。プロの曲をコピーしているのかもしれない。

うたい終わると、彼は「ありがとうございました」と言って、丁寧に辞儀をした。彼から一番近い位置にいた女性、——うっとりとして彼の歌を聴いていた女性が、拍手をする。それにつられて数人が、やる気のなさそうな小さな拍手を送った。

彼は帰っていく観客たち全員に手を振り、楽器を片づけてから、

私のもとへとやってきた。相変わらず、ファーストフード店の店員のような爽やかスマイルを張り付けている。

「ごめん、お待たせ」

「最後に歌ってた曲、誰の曲だっけ」

お待たせってデートみたいに言うなよと内心で突っ込みながら、私は彼に尋ねた。彼が首をかしげる。

「誰のって、どういうこと？」

「さっきの曲って、プロの曲をコピーしてるんでしょ？」

「いや」

彼は照れ臭そうに、人差し指で鼻の頭を掻きながら笑った。

「あれは、俺が作った歌だよ」

「え？」

だとしたら私は今日初めて聞いたはずだ。なのに私はそれを知っていた。——有名な曲のフレーズに似ていたんだろうか。

「……やっぱり覚えてないのかー」

彼はがっくりと肩を落とした。背負っているギターがずれてきて、彼はあわてて肩にかけ直す。それから、少しだけ寂しそうに笑った。

「俺がうたうようになったのは、君のおかげなのに」

「え？」

先ほどから間抜けな返事をしているが、想定外のことばかり言われているのでこんな反応になってしまう。「君のおかげ」なんて初めて言われた。しかも多分、良い意味で。

「とりあえず、移動しない？ ゆっくり話したいし」

「え、話す？」

「何かおかしい？」

私と長話しようとする客は珍しい。というか、初めてかもしれない。彼が何を考えているのか分からなくて、私は彼の目を見つめた。彼は私からふいっと目をそらしてから、やっぱり照れ臭そうに鼻の頭を掻いた。

どうして私は、この訳のわからない男と、回転寿司に来ているんだろうか。

晩御飯食べた？ と訊かれたので素直に首を振ると、じゃあどこかに食べに行こうと言われた。その結果が、一皿百円の回転寿司だ。テーブル席が混んでいたので、カウンターに二人で並んで座った。誰かと食事をするのも、回転寿司も久しぶりだった。

「俺のおごりだから、じゃんじゃん食べてよ」

彼は笑顔を張り付けたまま、目の前を通り過ぎていく寿司を次々と取りはじめた。もちろんそれは私のためではなくて、彼の分だ。私はとりあえずサーモンを取ると、割り箸を割った。

「……よく来るの？ ここ」

タッチパネルを難なく使いこなしている彼を見ながら、私は尋ねた。回転寿司なんて滅多と利用しない私は、タッチパネルの使い方を知らなかった。

「うん。バイト代が入った時とか、嬉しいことがあった時とかに一人で」

「……ふーん」

訊いてみたものの、大して興味はなかった。私は明らかに興味の

なさそうな返事をして、サーモンを口に放り込む。……脂がのつておいしい。回転寿司って、こんなにおいしかったっけ？

サーモンばかり取っている私を見て、彼は笑った。

「サーモン好きなんだ？」

「……別に」

「ちなみに俺は、マグロが好きだよ」

「あっそう」

ものすごくどうでもいい情報を提供されて、私は苦笑した。自分の『客』について詮索をするつもりのない私は、彼の名前も住所も年齢も尋ねる気はなかった。が、

「俺、はせがわ長谷川隼人。はやと隼人でいいよ」

彼の方から個人情報を言ってきた、私はまたもや苦笑した。まあ、彼が言っているのが本名なのかどうかは知らないが。

「……長谷川隼人、って名前を聞いても思い出せない？」

彼は割り箸を右手に持ったまま、深刻な顔でそう言ってきた。――記憶喪失になった人間って、こんな気分なんだろうか。「覚えてない」と、私は正直に首を振った。申し訳ないけれど、どう頑張っても思い出せそうになかった。

「そっかあ」

彼はがっくりしながら、目の前にあった醤油入れを箸でつつく。

「俺は、君の名前まで覚えているのに」

そう言われてぎょっとした。たまに『客』に名前を訊かれることがあったが、いつも偽名を使っていた。しかも毎回、違う名前を。私は彼に、なんて名乗ったのだろう。さくら、あい、しょうこ、れいな……他にもいっぱいあったはずだ。彼に名前を訊かれた時、どれを使っただろう。

「……私の名前、言ってみてくれる？ 私はあんたのことを思い出せそうにないし、もしかしたら人違いかも」

回転寿司まで奢ってもらっておいてこんなことを言うのは失礼だけど、本当に思い出せないんだからしょうがない。

彼は割り箸を皿の上に置くと、私の目を見て言った。

「早苗^{さなえ}。……塚本^{つかもと}、早苗^{さなえ}」

彼の言葉を聞いた私は、目を見開いて凝り固まった。その名前は、

もう何年も使っていない、私の本名だった。

——客じゃない。客相手に、本名を言ったことは絶対ない。……彼は客じゃなかったんだ。だとすれば、

「中学まで同じ学校に通ってたんだけど」

彼に言われて、私は目を閉じる。そう。つまり、同級生だったということだ。中学卒業と同時に、私が家を出るまで。

どおりで思い出せないはずだ。私はその頃の記憶を完全に封じ込めて忘れようとしていた。そもそも子供のころに友達なんて作らなかったし、休み時間も一人で本を読んでるような影の薄い生徒だった。他の生徒に興味もなかったので、クラスメートの顔ですらほとんど覚えていない。そんな私が、……特徴らしい特徴のない彼の顔を、覚えているはずがなかった。

「学校を卒業してから、塚本が失踪したって聞いて――」

「名字で呼ばないで」

思わずきつい口調で言ってしまい、彼がきよとした顔でこちらを見てくる。けれど名字は、どうしても嫌だった。

「その名前はもう捨てたの。だから、呼ばないで」

「じゃ、なんて呼べばいい？ ……さな、とか？」

それも本名をもじっているけれど、名字で呼ばれるよりはマシだ。私は頷く。

彼は「じゃ、さなって呼ぶから」と一人で宣言してから、

「さなが失踪したって噂になってたよ。俺も探したけど、見つからなかった。俺、今年から……大学生になってから、一人暮らしを始めたんだ。自宅から学校まで結構距離があったしさ。そしたら、さなそっくりの人を見かけてびっくりした」

「……よく、私だって分かったわね」

「だって顔、変わってないじゃん」

彼は私の顔を見ながらくつくつと笑った。私は無言でサーモンを食べる。自分の顔が昔とほとんど変わっていないことは、自覚していた。しかしまさか、同級生に声をかけられるとは思っていなかった。私の住んでいた街からこの街までは、割と距離がある。……だからこそ彼も家を出て、一人暮らしを始めたんだろうけど。

「……さなはさ、家に帰らないの？」

そう言われて、私は彼の顔を睨んだ。あの家に帰れって？

「あの家は、私の家じゃない」

私はそう吐き捨てると、割り箸を置いた。昔の話をするのは、もう懲り懲りだ。

「私はもう、あんたの知ってる人間じゃないんだよ。失踪してから、私がどんな風に生きてきたかなんて知らないでしょう？ 塚本早苗は死んだの。とっくの昔にね」

私が席を立とうとすると、彼が腕を掴んできた。思ったよりも力が強くて、一瞬だけひるむ。けれどそれを悟られないように、私は彼の顔を真正面から睨んだ。

「……はなしてよ」

「君がいま、何をしてるのかは大体知ってるんだ。実は何回か、さなを目撃したことがある。……おじさんと一緒に歩いているところと

か」

最後の方を小さな声で、彼が言う。私はそれを聞いて、思わず吹き出した。

「だったら、もういいよね？ おっさんと寝てばっかの女なんて、興味ないでしょ」

その言葉を聞いて、彼の顔がゆがんだ。……客と歩く私の姿を何度か目撃したものの、本当に『やっている』のかどうか、確認できなかったらしい。馬鹿な奴。私は嗤^{わら}った。

「分かったらその手、はなしてくれる？」

「……………」

「なんなら、あんたのお相手もしましょうか？ 一晚、家に泊めてくれるだけでいいわ。それとも、ホテルにでも行く？」

私の言葉に、周りの客が数人振り向いた。私はわざと、こちらを見ている人間と視線を合わせる。みんな、私と目があった途端、気まずそうに視線を泳がせた。

ほら見ろ。こんな女と一緒にいるなんて、恥ずかしいことなんだよ。

「……家に泊めるだけで、いいのか」

予想外の答えに、私は眉をひそめた。彼は私の腕を掴んだまま、

はなそうとしない。

「——そうよ。眠る場所と、ご飯代をくれればいいの。それが私の値段。あんたの場合、回転寿司はごちそうになったから、あとは寝床だけでいいわ」

私が笑いながらそう言うと、彼はしばらく考え込んでから頷いた。彼の目は、とても力強かった。

「分かった。俺の家に来て」

「え？」

「毛布もあるし、どうにかなるよ」

彼は自分自身に確認するかのようにそう言って、柔らかく笑った。

彼の家は、夕食を食べた回転寿司から歩いて五分ほどのところにある、ワンルームマンションの四階だった。ワンルームといっても部屋はせまくないし、家賃もそこそこ高いはずだ。学生にしてはい家に住んでるなと思ったら、家賃と生活費を実家から仕送りしてもらっているらしい。

「自分でバイトして稼ぐからいらなんて言っただけど、親が心配性で」

そう言って苦笑する彼から、顔をそむけた。

親が心配してくれるなんて、私が住んでいた家ではあり得ない。

「どうぞ。あがって」

彼に促されて、私は中へと足を踏み入れた。

今日会ったばかりの男の部屋に入る娘。普通の親なら、心配するんだろうか。……我ながら、どうでもいいことを考えすぎている。

私は一人で嗤いながら、彼の部屋を見回した。

彼の部屋は持ち主をそのまま表していると言うか、あまり特徴のない部屋だった。部屋にあるのは折り畳み式のローテーブルとパソコン、小さな木製のたんす、それから彼が壁に立てかけたギターくらいだ。ポスターなどは貼っていない。布団は押し入れの中らしい。特に散らかっているわけでも、派手なわけでもない。思わず私は苦笑した。

「適当なところに座って。何か飲む？ 水道水か、麦茶か、コーラし

かないけど」

「コーラ」

「分かった。ちょっと待ってて」

彼はそう言い残すとキッチンへ向かった……と言っても、部屋の中に備え付けられているキッチンだけだ。

彼は透明なグラスを二つ用意してコーラを注ぎ、

「お待たせー」

言うだろうなと思っていたセリフを言いながら帰ってきた。大して待っていないよと思いつつ、私はコーラを受け取る。グラスの中ではじける泡の音が、かすかに聞こえた。

ベランダに面している窓の近くに座って、外を見る。先ほどの回転寿司の看板が、遠くの方で煌々と光っているのが見えた。

「……さなは、あまり昔のことを話したくはない？」

彼の声を、私は無視した。話すどころか思い出したくもなかった。彼との約束も、もうどうでもいい。どうせ大した約束じゃないはずだ。こいつと会うのは今日で最後。明日になったら他の街に移ろう。住所不定ってこういう時に便利だよなと内心で笑った。

私の沈黙の意味を理解したのか、彼も黙りこんだ。二人の男女が同じ部屋にいて、無言。なんてシュールな光景だろう。

そう思っていたら、彼が突然うたいだした。公園で歌っていた、あのメロディーだ。彼の歌声は高くも低くもなく、けれど心地の良い声だった。なんとなく口ずさめそうなその歌を、私は無言で聞く。

彼はサビだけうたい終わると、目を細めた。

「俺はさ、さなに会えてよかったって思ってるんだよ。さなが覚えていなくても、俺にとっては大切な思い出なんだ」

「……へえ」

過去の私が、こいつに何かしたのだろうか。けれど思い出したくなくて、私は話をそらした。

「あんた、明日は大学？」

「え、うん。そうだよ」

「じゃ、さっさと寝た方がいいんじゃないの」

私はコーラを飲み干すと、テーブルの上にグラスを置いた。心の中で、仕事の態勢を整える。彼は時刻を確認して、笑った。

「本当だ。明日は一限からだし、早く寝た方がいいかな」

「じゃ、さっさとしてよ」

「？ 何を？」

「は？」

つかの間の沈黙。それを破ったのは彼の笑い声だった。私の言葉の意味を、理解したらしい。

「ああ、いやごめん。俺、そういうことをする気はないよ」

「え？　じゃあなんで私を部屋に泊めたの」

私の問いに、彼の笑い声がぴたりと止まった。そして、

「――これ以上、自分を痛めつけてほしくなかったから」

彼の目が急に真剣になって、私は困惑する。中身の半分残ったグラスをテーブルの上に置いて、彼はまっすぐこちらを見た。

「何度かさなを目撃したって言っただろ？　……さなはいつも泣きそうな顔してたよ」

「私が？」

家を出てから泣いたことは一度もない。泣きそうになったこともない。なのに、何を言ってるんだこいつは。

「本当は好きじゃないんだろ？　……おじさん達とそういうことするの」

私は黙った。好きじゃないという点は、当たっていると言えは当たっている。彼は「おじさん達というか、」と呟くように付け足した。

「たとえ相手が俺でも、さなは嫌だろ？　――そういう思いはさせたくない」

「……………」

「俺の家に泊まらなかったら、他の男とホテルに行くのかもしれないと思って。俺は、あんな顔をしてるさなを見たくないんだよ」

返す言葉が見つからなくて、私は彼の目を見ることができずに俯いた。四年間封印していた箱を、彼に少しだけ触れられた感じ。それが何故か悔しくて、

「変な男」

私が呟くと、「よく言われる」と言って、彼は笑った。

目が覚めると、香ばしいにおいが部屋に充満していた。何かを炒めている音が聞こえてくる。私は布団の中から、キッチンの方を見た。

フライパンの前に立っている彼の後姿が見える。その横で、オーブントースターが赤く光っていた。パンを焼いているらしい。

私は自分の下着と服を探そうとして、どちらも身につけていることに気がついた。裸で眠る日の方が圧倒的に多いせいで、ついつい下着を探したくなる。そんな間抜けな癖に気付いて、一人で苦笑した。それからのそりと布団から起き上がり、彼のもとへと近寄った。

彼はフライパンの右半分でソーセージを、左半分で目玉焼きを器用に焼いていた。目玉焼きは二つ。オーブンの中の食パンも二つ。――私の分の朝食も、用意してくれているらしい。

「――うわあ!!」

私が後ろに立っていることに気付いた彼が、間抜けな叫び声をあげる。

「びっくりしたー。いつの間にそこにいたの? おはよう」

「……おはよう」

私は寝癖のついた髪の毛をいじりながら、ぶっきらぼうに返した。髪が柔らかいせいなのかなんなのか、妙に寝癖がつきやすくて困る。髪の長さは肩よりも下くらいだけど、それも関係しているのだろうか。

「ねえ、ドライヤー貸して」

「どうぞ」

彼はフライパンの上でウインナーを転がしながら「朝ごはんももうすぐできるから」と笑った。

油でテカテカに光っているソーセージ、黄身が程良く半熟に仕上がっている目玉焼き、きつね色のトースト、生野菜サラダはレタスとトマトで彩りよく。それから、麦茶。

「飲み物が、オレンジジュースか牛乳だったら完璧だろ？」

私が思っていたのと同じことを、彼が笑いながら言った。まあ別に、麦茶でも構わないのだけど。

「いやあ、誰かと一緒に朝ごはん食べるの久しぶりだな。いただきますーす」

「……いただきます」

私は、いただきますと言うのすら、久しぶりだった。

「昨日、よく眠れた？」

彼に訊かれて、私はうなずく。

「むしろ、あんたの方が眠れなかったんじゃないの？」

彼の家には布団が一つしかなかったので、私が布団を使い、彼は床の上で寝る羽目になったのだ。……私は添い寝してもいいと言ったんだけど、彼に断固拒否された。結局、この季節にしては少し分厚く、冬ならば少し肌寒いであろう微妙な薄さの毛布1枚で、彼は眠った。

私の問いかけに「肩が少し痛いかなあ」と答えながら、彼は笑った。

「でも大丈夫。雑魚寝とか慣れてるし」

「……ふーん」

まあ、床の上で寝るのも今日で終わりだろうけど。

「今日さー。俺は大学あるんだけど、さなはどうする？　一緒に来る？」

「は？」

私は食べようとしていたトマトを、机の上にぼとりと落とした。彼がそれを見て笑う。面倒になった私は素手でトマトをつまむと、口の中に放り込んだ。

「なんで私があんたの大学に」

「だって、家にいても暇だろ？」

「いや、ていうかもう、この家も出ていくから」

「え、なんで!？」

目を丸くした彼を見て、私も目を丸くした。

何を考えてるんだ、こいつ。まさか、このまま一緒に住むとも思っていたんだろうか。

「なんでって、ここは私の家じゃないし」

「この家、気に入らなかった？」

「そういうわけじゃないけど」

「じゃ、一緒に暮さない？」

そこら辺で拾ってきた猫を飼うみたいな気楽なノリで、一緒に暮さないか提案してきた彼に呆れた。私を猫扱いしてくれるのは別に構わないけれど、猫を飼うのと人間を飼うのとはわけが違う。大体、意味が分からない。

「なんで一緒に暮らすの」

「君を止めたいから」

先ほどの気楽なノリはどこかへ吹き飛び、至極真面目な顔で彼は言った。その切り替えの速さに、私はどきりとする。けれどそれに気付かれなくて、私は彼の目を睨みつけた。

「私の『仕事』のことは、あんたには関係ないでしょ」

「関係ない。けど、俺は辞めさせたいんだよ。わがままなもんで」

開き直られたら、それ以上突っ込めない。言い淀んだ私に、彼はさらりと言った。

「バイトならさ、良い所を知ってるんだ。そこを紹介する。身元照会とかそういうのは心配なくていいよ。……その店、俺の家から近いんだ。だから、俺の家から通えばいいじゃん」

「……………」

「——それとも君は、今のままの方が幸せなの？」

寂しそうに笑う彼に、私は何も言えなかった。

「昼過ぎに戻ってくるから待って。さっき話してた店に、一度行ってみようよ。働くかどうかは、君が決めればいいし」

じゃあ行ってくるねと言い残して、彼は大学へと向かった。大学に行ってもやることのない私は、彼の家にいることにしたのだ。…
…馬鹿正直に。

彼がいない間に、逃げ出せばいいじゃないか。失踪は、得意でしょう？

そう思っている反面、私は彼の何かにすがりつこうとしていた。

例えば私は、女としての何かを捨てた。

けれど私は、女としての何かにすがりついて生きている。

結局、捨てたはずの何かに頼っているんだ。——彼に対しても、そう。

他人のことなんて、信用してなかったくせに。

「——馬っ鹿みたい」

私は大きな独り言を言うと、彼の部屋の押し入れを開けた。押入れの上の段には服が、下の段には布団が入っている。上の段のあいだにあるスペースに、大学で使っているのだろう資料が積み重なっていた。——と思ったら、それはすべて手書きの楽譜だった。一番上にあった楽譜を一枚、手に取ってみる。楽譜を読めない私には、そこに綴^{つづ}られている曲がどんなものなのかは分からない。けれど日本

語はある程度読めるので、音符の下に書かれている歌詞は、理解することができた。

「……君が笑ってくれるから、僕はうたうんだ。君の姿が見えなくても、ずっと、ずっと。僕は今日もうたい続ける。この声が、いつか君に届けば、それでいい」

口に出して読んでみて、そのリズムに気付く。私は唯一知っている彼のオリジナル曲に合わせて、その詞をうたってみた。――ぴったりだった。

「これ、あの曲の楽譜か」

一人で納得して、もう一度うたってみた。サビだけは、何故かしっかりとうたえた。

君が笑ってくれるから、僕はうたうんだ。

「……この曲、なんでこんなに懐かしい感じがするんだろ」

私は楽譜を元の位置に戻すと、敷きっぱなしだった布団の上に寝転がり、目を閉じた。

よく分からない。けれど、気持ち悪い。痛い。怖い。
家に帰りたくなくて、砂場でうずくまっている私に、誰かが声を

かけてきた。

「おうちにかえらないの？」

「かえりたくない」

私は泣きながら首を振った。近づいてきた人は、私の隣に座って

「……な。さな」

ぼんやりとした視界の中に、彼の顔が見えた。気づけば眠っていたらしい。それに何か、変な夢を見た。彼が心配そうに、私の顔を覗き込む。

「大丈夫？ 具合悪いの？」

「……ううん。昼寝してただけ」

私は彼の腕時計にちらりと目をやる。現在、午後二時過ぎ。どうやら三時間近く眠っていたらしい。私はため息をついて、上体を起こした。彼が気を利かせて持ってきた麦茶を一気に飲み干して、もう一度ため息をつく。

「大丈夫？」

「平気だってば」

私は彼に空になったグラスを返すと、立ち上がった。シンクにグラスを置いている彼に、後ろから声をかける。

「で、なんかの店に連れて行ってくれるんでしょ？」

さっさと連れて行けと促すつもりでそう言うと、彼はこちらを振り返って苦笑した。そして自分の頭を指差しながら、

「その前に、寝癖直した方がいいと思うよ」

茶化するような笑顔でそう言った。

「……ドライヤー貸して」

「どうぞ」

私は右に向かつてはねている自分の髪の毛をいじりながら、何度も目から分らないため息をついた。

彼に案内された場所は、タコ公園の近くにある小さな喫茶店だった。木製の外壁は焦げ茶色で、良い意味でも悪い意味でも渋くて古めかしい店だ。ドアの前に、膝の高さくらいのダルメシアンが鎮座している。陶器のそれは所々が禿^はげていて、これのせいで余計に店の外観が古めかしく見えているんじゃないかと思った。ダルメシアンの首輪には、『Welcome 喫茶ダンデ』と書かれたプレートがついている。

「こんにちはー」

彼は何のためらいもなく、喫茶店のドアを引いた。やっぱりというかなんというか、ドアは自動じゃない。中に入ると、眠たくなるようなバイオリンの音が聞こえてきた。温かな色の照明と、コーヒー豆を挽く香り。店内には小さな観葉植物がいくつか置かれていて、『くつろぎの空間』と言わんばかりの風景になっていた。客は、数人程度だ。

「あ、いらっしゃい隼人君」

愛想のよい笑顔でそう言ってきたのはカウンターにいるおじさんで、恐らくこの人がマスターなんだろう。第一印象は、「黒いちよびヒゲ」。……私があだ名をつけると、残念なくらいセンスがないのがよく分かる。

日焼けしたような肌の色に、ポマードで固めた黒髪、二重で大きな目。身長は百八十センチくらいだろうか。それよりも何よりも、ちよびヒゲが気になって仕方がない。

「どうも、チョビさん」

彼がそう言ったのを聞いて、私は吹き出してしまった。
こいつのセンスもそんなもんか。

「？ 彼女は？」

彼の後ろにいる私を覗き込むように、マスターがカウンターから
身を乗り出してくる。大きな目をぎよろぎよろさせて、だけど嫌な
感じはしない目つきだ。

ちよびヒゲのマスターはにやりと笑って、

「はっはーん。隼人君のかーのじょー？」

リズムカルにそう言った。それを聞いた彼が苦笑する。

「んー。彼女というかなんというか」

付き合ってもないのに同棲してる変な女というか。

「チョビさん、バイトを募集してるって言ってたじゃないですか。
で、この子を紹介しようかと思って」

「本当！？ やだ、嬉しい！」

……ここにきて気付いたが、ちよびヒゲのマスターはどうも女性
っぽいというかなんというか、そんな感じだった。まあ別に、だか
らと言って何の問題もないのだけど。むしろ私は、そういう人たち
の方が好きだった。

「ねえあなた、お名前は？」

「え？ えーっと」

「さな、です」

私の代わりに彼がさらりとそう言って、マスターはうんうんと頷いた。

「かわいい名前！　じゃ、さなちゃんって呼ばせてもらうわね！」

……普通、仕事中心で名字で呼ぶものなんじゃないのだろうか。しかしマスターは私の名字を訊こうとはせずに、

「さなちゃん、いつから仕事に来れるかしら？」

鼻歌でもうたいだしそうな高揚した声で、そうやってきた。

「え？　あ、明日からでも……」

「本当！？　助かるわあ」

マスターは顔の前で両手を合わせて、笑った。それにつられて私も笑う。ちょうどそのとき店のドアが開いて、制服姿の女の子が中に入ってきた。――あの制服は確か、この近くにある高校のものだったはずだ。

彼女は私の前にいる彼の顔を見て、

「隼人さん！」

嬉しそうな顔をしてから、ちらりと私の方に目をやった。

私も彼女のことをよく覚えていた。昨日、彼が路上ライブをしている時に誰よりも聞き惚れていたあの女の子だ。

「おかえりなさい。かすみ、明日から店のことは心配しないで。そこにいるさなちゃんがね、ここで働いてくれることになったのよ。だからあなたは、受験勉強に専念して」

マスターが優しい笑顔でそういうと、かすみと呼ばれた女の子は「……準備してくる」とだけ言い残して、店の奥へと消えていった。その声は少し震えていて、私は若干の気まずさを感じた。

多分あの子は、隼^{かれ}人のことが好きなんだ。

マスターは娘の変化に気付いているのかいないのか、人懐こい笑顔を崩さずに続けた。

「それじゃ、明日からよろしく頼むわー。朝の六時頃、来てくれるかしら」

「六時!？」

「モーニングをやってるからねえ」

朝に弱い私は、冷や汗をかいた。そんな私の顔を見た彼が、苦笑する。

「起こしてあげるから大丈夫だよ」

「まー！！ 同棲してるの！？」

マスターが大きな声で反応して、店内にいた数人の客がこちらを向いた。私はあわてて嘘をつく。

「モーニングコールしてくれるという意味です！ そうよね！？」

私が睨むと、彼は笑うのをこらえながら「そうそう」と呟いた。

その様子を、店の奥でかすみちゃんが見ていることに、私は気付いていなかった。

『自営業』しかしたことのない私は、誰かの店で働くのは初体験だった。

彼に喫茶店を紹介してもらった翌日、私一人で店を訪れると、マスターが爽やかスマイルで待ち構えていた。

「おはよう、さなちゃん！ 今日土曜日でしょう？ だから、モーニングの時間帯もそんなに混まないと思うの。リラックスして働いてね！」

「はい」

「あと今日は、娘のかすみが、さなちゃんの教育係になったから！ 仲良くしてあげてね」

「えっ」

マスターの横を見ると、かすみちゃんが恐ろしい剣幕でこちらを見ていた。

おいおい、マスターはかすみちゃんの気持ちに気付いていないのだろうか。

「……制服をお貸しします。こちらへどうぞ」

透き通るような凛とした声でそう言うと、かすみちゃんは店の奥へと向かった。私はマスターに浅くお辞儀をしてから、かすみちゃんの後に続いた。

店の奥は、段ボールが積み重なった倉庫のような状態で、その中に制服も紛れ込んでいた。かすみちゃんは私の体型を見て、適当なサイズの制服を引っ張りだす。私は後ろから、かすみちゃんの横顔を眺めた。少しつり上がっている切れ長の目と、薄い唇。頬が白いせいで、そばかすが目だっている。

彼女は私よりも年下のはずだけれど、年上だと言われても納得してしまいそうだった。

「これ、着てみてください。あと、髪は後ろで一つくりに」

「あ、はい」

彼女があまりにも事務的に話すので、世間話をする暇もない。私はとりあえず、かすみちゃんが渡してくれた制服に袖を通した。制服は白いポロシャツに黒のスラックス、その上に丈の長い黒エプロンという、ごくごく普通の地味なものだった。彼女に言われた通り、髪もきちんとまとめる。

着替え終わった私は、後ろで見ていたかすみちゃんに、「どう？」と訊いてみた。

「……やっぱかわいいですね」

無表情でそう言い放った彼女は、私ではなく、私の後ろを見ているように見えた。そこには、誰も立っていないのに。

彼女が唇を囁んでいるのを見て、私は苦笑した。

はっきり言って、私は「かわいい」部類の人間なんだろうと思う。目が大きかったり、唇の形が良かったり、肌がきれいだったり。ス

カウトされたことも、何度かあった。

けれど私の中身はぐちゃぐちゃで、誰にも見せられないくらい悲惨なものだ。

きっと、目の前にいる彼女の方が純粹で、綺麗なんじゃないかと思う。

彼とお似合いなのも、彼女の方だろう。

「――それじゃ、店に出ましょう。もうすぐ開店しますから。今日は基本的なことをお教えしたいと思っているので、よろしくお願いします」

「あ……よろしく」

彼女の言葉があまりにも硬すぎて、うまく返事ができなかった。

私の主な仕事は注文を聞くこと、マスターの作った料理やコーヒーを運ぶこと、時間が空いたら掃除。それくらいだった。レジはもう少し経ったら教えるわねとマスターに言われたので、今日はお冷や飲み物を持っていくことに専念した。

「いらっしやいませ」

営業スマイルを振りまきつつ、私はお冷をテーブルに置く。私の

隣のかすみちゃんは、険しい目つきでそれを見ていた。険しい目つきというよりも、彼女のスタンダードがその目なのだろうと思う。

コーヒーの種類に関してはチンブンカンブンで、ブルマンやらキリマンジャロやら、山の名前としか思えないような注文を続々と受けた私は混乱した。それを見ていたマスターは、「ちよつとずつ覚えればいいのよー」とウインクしてくれた。

常連客も気さくな人が多くて、新入りの私をすんなりと受け入れてくれた。

「お姉ちゃん。何なら後で俺とデートでも」

「おーきゃーくーさーまっ！」

マスターが止めて、全員で笑う。……一瞬でも『仕事』の態勢に入りかけた私は、苦笑いするしかない。そんな時でも、かすみちゃんは無表情だ。――敵対視されてるみたいでやりにくい。私と彼は、そんな関係でもないのに。

少しだけ仕事に慣れ始めた午後、彼が店にやってきた。黒の長袖シャツに迷彩柄のズボンという、ラフな格好で。

「いらっしやいませ、お客様」

私はわざと硬い口調でそう言って、頬が攣りそうなくらいの営業スマイルを振りまいた。それを見た彼が笑う。

「制服、似合ってるよ」

それを聞いたかすみちゃんが、私と彼の顔を交互に見てくる。…
…この男はどれだけ鈍感なのだろうか。私はいらいらしながら、「
好きなお席へどうぞ」と仏頂面で言った。

彼はマスターの前、カウンター席に座ると、

「じゃ、いつもの」

「え、いつもの!？」

彼の注文に思わず反応してしまった私に、マスターが笑う。

「そうねえ。常連さんはいつもの、って言うことがあるから。でも、
さなちゃんもじきに覚えちゃうわよ! ね、彼女、仕事の呑み込み
が早いわね。さっすが隼人君のかーのじょーっ!」

「ちょ……」

後ろから射抜くような視線を感じて、私は振りかえる。後ろにい
たのはやはりかすみちゃんだ。

——マスターといい彼といい、鈍感すぎる。

「あの。私と彼はそういう関係じゃないですから」

こちらできっぱりと言っておかねばなるまいと思い、私は声を
出した。

「あら。じゃ、どういう関係なの？」

マスターは興味津々、かすみちゃんは疑念たっぷり、彼は面白そうな目をして、こちらを見てきた。私は沈黙する。

「……………と、友達というか」

やっこのことと言ったそれは、私が持っていないものだった。これからずっと、持つことはないであろう『友達』。けれどそれを聞いた彼は、嬉しそうにうなずいた。

「そうそう、友達なんですよ。俺たち」

「え？」

目を丸くした私に、彼は歯を見せて笑った。

かすみちゃんの目だけは、まだ疑っているようだった。

彼はブレンドコーヒーを飲みながら、マスターと長い時間談笑していた。ちなみに彼の「いつもの」は、ブレンドコーヒーとスコーン、それから大きなカントリークッキーだった。

彼は腕時刻を確認すると、マスターに問いかけた。

「さなは、もうすぐ上がりですか？」

「あ、そうね。今日はもうそろそろ上がる時間だわ」

その答えを聞いた彼が、テーブルを拭いている私に声をかける。

「俺、待ってるから。一緒に帰ろう」

「え、あ、うん……」

「さなちゃん、お疲れ様。今日はもう上がって頂戴。明日もまたお願いできるかしら？」

店長は顔の前で両手を合わせて、片目を閉じた。どうも、『お願い』のポーズらしい。

「……分かりました。こちらこそ、よろしく願います」

私がほほ笑むと、マスターは嬉しそうに小さくとび跳ねた。

仕事を終えた私が店の奥に入ると、かすみちゃんがついてきた。彼女の声が後ろから聞こえてくる。

「お給料なんですけど。日給、週給、月給、どれがいいですか？」

「んー。じゃ、とりあえず週給でもらえる？」

「分かりました」

その後は、無言。振り返ると、腕を組んだまま棒立ちしているかすみちゃんと目があった。彼女が出ていこうとしないで、私はあきらめてその場で着替え始める。私が着替え始めると、彼女は後ろを向いた。けれど、やっぱり出ていこうとしない。

「……私に何か用？」

年下とはいえ職場の先輩なんだから敬語を使った方がいいんだろうけど、私は敬語が酷く苦手だった。

彼女は後ろを向いたまま腕を組んで、上体をゆっくりと前後に揺らしている。着替えながらその様子を見守っていると、彼女の動きがぴたりと止まった。それから、

「……隼人さんのこと、好きなんですか」

ロボットみたいな無機質な声で、そう訊いてきた。

「——いや。そんなことないけど」

「けど？」

揚げ足を取られて、私は黙りこんだ。それを彼女はどう捉えたのか、自嘲気味に笑ってからこちらを向いた。私はもう着替え終わっていて、制服を畳んでいるところだった。

「私は、彼のことが好きです」

私の目を見ながら、かすみちゃんは言い放った。

「彼が誰のことを好きであっても、私は、彼のことが好きです」

誰のこと、を強調されたので、私は言い返す。

「——……彼が誰のことを好きなのは、彼にしか分からないわよ」

「いいえ」

彼女は自分の腕に爪を立てながら、

「彼は、あなたのことが好きですよ。そういう目をしてる」

こちらを見上げるようにして言いきると、早歩きで外へと出ていった。

——私は、どちらかといえば彼のことが好きだった。
けれどそれは、人間として。

私を知っている男と、彼は、何かが違っていた。そういう意味で、私は彼のことを好きになっている。気にいっているという言い方でもいい。

けれどそれが恋愛感情なのかと訊かれれば、……分からない。

だって私は恋愛感情^{そんなもの}、知らないから。

マスターとかすみちゃんに見送られて、私は外に出た。程よく疲れっていて、気持ちが悪かった。

「——で、どうだった？ あのレストランは」

隣を歩いていた彼が優しく、そして少し心配そうに訊いてきた。

「ん。働きやすかった、かな」

あんたとマスターが、もうちょっと乙女心を分かってたらねと内心で付け足した。もちろんそんな声は届いておらず、安心したよと彼はため息をついた。

流されてるなあ、と思う。私は。

彼の家から逃亡することも、喫茶店で働くのを拒否することも、簡単にできたはずだ。

なのに私は彼に流されて、今までとは少し違う生き方を始めようとしている。

……流されてる、ではなくて。

——流してほしかったのかも、しれない。

「……あのさ」

「ん？」

彼は相変わらず、優しい笑顔をこちらに向ける。私はその顔を直視できなくて、向こうから歩いてくる野良猫を見ながら小さな声で言った。

「ありがとう、隼人」

「おっ」

彼が嬉しそうに、笑った。

「初めて名前、呼んでもらえた」

私はしばらく俯いたまま、早足で歩き続けた。

隼人は大学帰り、つまりは夕方から夜遅くまで、ファミレスでバイトをしていた。週四のシフト制、らしい。私の仕事は夕方で終わるため、夕食は「冷蔵庫にあるものを好きに食べていいから」と彼に言われていた。しかしいざ冷蔵庫を開けてみると、野菜とか生肉とか、……つまり、調理しないと食べられないものばかりだった。

そして私は、料理ができる人間ではなかった。

コンビニでサンドイッチを買って帰り、それを頬張りながら、喫茶店のメニューを覚えた。マスターが、コーヒーの名前とその特徴をメモして、私にくれたのだ。字は丁寧だしとても読みやすいけど、『このお豆は、酸味があるのが特徴的よん！』などと書かれているあたりがマスターらしい。私は一人でやつきながら、マスターのメモを読んだ。

「ただいまー」

隼人は二十二時過ぎに帰ってきた。何か買ってきたのか、ビニール袋がガサガサと音をたてている。

「おかえり」

私はマスターのメモに目を落としたまま、返事をした。つかの間

の沈黙。……彼が部屋に上がってくる気配がなくて、私は玄関の方を覗いた。

彼は玄関先で、花火の入った袋をブラブラさせながら笑っていた。恐らく、千円くらいのセットだろう。

「花火しない？ そろそろ花火の季節も終わるしさ」

「二人で？」

「他に誘いたい人、いる？」

私は一瞬、かすみちゃんの顔を思い浮かべてから首を振った。彼女を呼んだら、ややこしくなる気がする。

「ううん。特にいない」

「じゃ、タコ公園にでも行こう」

彼は先ほどから靴を履いたまま、私のことを待っている。私は読んでいたメモ帳を閉じると、ゆっくりと立ち上がった。

夜のタコ公園には、不良っぽい中高生がちらほらいるくらいで、昼間に比べると人は少なかった。蛸の遊具が下からライトアップされていて、かえって不気味な感じがする。

「公園の端っこでいいよね。目立たないし」

私たちは適当な場所に移動すると花火の袋を開けて、安物のライターで付属品のろうそくに火をつけた。私はとりあえず、身近にあった花火を掴んで、火にかざしてみる。しばらく間をおいてから、勢いよく火花が噴き出した。

「それ、三色に色が変わるやつかなあ？」

私の持つてる花火を見ながら彼が笑う。それから咳こんだ。どうも、花火の煙を吸い込んだらしい。私が笑っていると、赤色の光が青色に変わった。

「本当だ。色が変わった」

数えるほどしか花火をしたことのない私は興奮していたし、緊張もしていた。彼は咳こみながらも「スパーク！」と叫び、バチバチと音が鳴る花火に火をつけた。それからこちらを見て、目を細めた。

「さな、最近変わった」

「……そう？」

「うん。一週間前はもっと、トゲトゲした感じだった。ウニみたいな」

「たとえば悪いわね」

私が突っ込むと、彼は「失礼」と言って笑った。

「でも本当にさ、会ったところはトゲトゲだったんだ。近寄りがたいというか」

「そんな人の腕を掴んだのは、どこのだいづよ」

私の花火が、青色から白色へと変わる。それに合わせて、私たちの顔の色も変わった。

「だって、さなに会えたのが嬉しくてさ。トゲとか気にせず掴んじやっただよ」

彼は嬉しそうに、自分の持っている花火を左右に振った。火花が滝のように、地面に落ちていく。私の花火は燃え尽きて、灰が赤く光っているだけだ。私は用意していたゴミ入れにそれを入れると、新しい一本を掴んだ。彼は笑っている。

「あの約束も、守れるといいなあ」

その言葉を聞いた私は新しい花火に火をつけながら、彼の顔を覗いた。彼は花火を見ながら、何かを思い出しているようだった。

——彼の言う約束って、なんなんだろう。

けれどその約束を聞いたら、自分が封印していた記憶^{もの}まで出てきそうで、怖かった。

「さなちゃん、これ。少なくて悪いんだけど」

閉店後、マスターがすまなさそうに、けれども笑顔で、私に茶封筒を差し出してきた。モップがけをしていた私が首をかしげると、マスターはにやりと笑った。

「やだ、忘れてたの？ さなちゃんがウチに来てから、今日でちょうど一週間なのよ。週給って約束だったでしょ？」

「……あ」

すっかり忘れていた。この一週間、コーヒーの種類を覚えたり、接客するのが楽しくて、給料という概念が私の頭から抜け落ちていた。

楽しいとは言ったものの、やっぱりまだうまく働いていない。それなのに、お金をもらうなんて悪いような気がした。けれどマスターはいつも通りの優しい笑顔で、私に茶封筒を渡してくれた。

「さなちゃんが来てくれて、本当に助かってるのよ！ 今まではね、娘のかすみが店を手伝ってくれてたの。でもあの子も気づけば高校三年生で、受験生でしょ？ さすがにずっと店の手伝いをしてもらうわけにはいかないわ、って思ってたのよ」

「そうなんですか」

私が初めてこの店に来た時、マスターがかすみちゃんに「受験勉強に専念して」と言っていたのを思い出した。九月にもなれば、受

受験は大変、……なんだろう。私は受験なんてしたことないから、知らないけれど。

マスターは少しだけ逡巡してから、片手だけで拝むようなポーズをした。マスターの『お願い』ポーズだ。

「さなちゃん。よかったらまた、かすみとお話してくれないかしら？」

「え？」

「かすみの母親ね、かすみが小学生のころに死んじゃったのよ。で、あの子、同年代のお友達もあんまりいなくてねえ」

ほらあの子、トゲトゲでウニみたいでしょ？ マスターは苦笑した。隼人から全く同じ比喻表現を使われた私は、笑うしかない。マスターと隼人は何かが似ていて、かすみちゃんと私も何かが似ていた。

「だから変な言い方だけど、仲良くしてあげてほしいの。やっぱり女同士じゃないと分からない話って言うのもあるじゃない？ 私、こんなだけで一応男だし」

マスターがちよびヒゲをいじりながら笑った。私も思わず笑う。

「恋愛のこととかさ、女の子の同士の方が相談しやすいかと思って」

そんなことを爽やかに言ったマスターに、私は反論したくて仕方がなかった。私が、かすみちゃんから恋愛相談を受けるなんて、お

かしいを通り越している。彼女は私のことを恋敵だと、今でも信じ込んでいるのに。

けれどマスターの顔を見ていたら、そんなことは言えなかった。何故かその時のマスターには、悲壮感というか、焦燥感というか、そういうものが漂っていた。

「……分かりました。今度、かすみちゃんに声をかけてみます」

私は出来る限りトゲのない笑顔を、マスターに向けた。

「私のおごりだから、じゃんじゃん食べてよ」

私は一週間前に言われたセリフを、隼人に向けて言った。場所はもちろん、一週間前と同じ回転寿司だ。今回はカウンター席ではなく、テーブル席に座っているけれど。

マスターのくれた茶封筒の中には、二万円入っていた。週給、二万円。つまり月給だと八万円くらいだろうか。それが多いのか少ないのか、まっとうなバイトをしたことのない私には分からない。けれど、常連のおじさんと一度寝れば手に入るはずのその二万円は、私にとっては貴重だった。初めて、まっとうに稼いだお金というか。

そして私はその給料を有意義に使うため、隼人を誘って回転寿司に来たわけである。

目の前の隼人は嬉しそうに笑いながら、私の分までお茶を注いで

くれていた。

「初給料入ったんだって？ おめでとう！ むしろ俺がご馳走するよ。一週間お疲れ様ってことで」

「は？ それじゃ意味ないの！！ 今日私は私が奢るって決めてるんだから、あんたは好きなもんをたらふく食べればいいのよ。あ、二万円の範囲内で」

私がそう言っていると、「いくらなんでも二万円分も食べないよ」と、彼は笑った。

寿司の食べ方にも、個性みたいなものが出る。自分の好きなサーモンばかり取っている私とは違い、隼人は一皿ずつ違うネタを食べていた。ただ、マグロにだけは何回か手をつけている。マグロが好きだと言っていたのを思い出して、私は内心で笑った。

「……そういえば、隼人はさ。どうやってマスターと知り合ったの？」

「ん？ ああ」

隼人は鉄火巻きを頬張りながら、笑った。

「かすみちゃんがあの店を紹介してくれたんだよ。俺の歌をよく聴きに来てくれててさ、コーヒーをご馳走したいって」

なるほど。

「彼女、俺の歌をよく聴きに来てくれてるんだ。で、その度に喫茶店にお邪魔してたら、マスターとも仲良くなって。かすみちゃん、俺の歌のファンだって言ってくれてさー。そういうのって照れるけど、やっぱり嬉しいんだよね」

キラキラした目で語る隼人を、私は睨んだ。

かすみちゃんは『あんたの歌』のファンじゃなくて、『あんた』のファンなのだ。

どうしてそこに気付かないのだろうか、この鈍感君は。

「？ 俺の顔に何かついてる？」

心持ち首をかしげる彼に、「目と鼻と口がついてるわ」とぶっきらぼうに答えた私は、まるで小学生のようだった。

どうしてこんなことになったんだろうって

そんなことを考える前に 前に進んでしまえばいい。

迷路から抜け出せたなら、その時は一緒に笑おう。

私はタコ公園のベンチに座って、彼の歌を聞いていた。

彼の歌詞は、いつも真っ直ぐだ。

本人にそう言ったら、笑われた。

「真っ直ぐなものほど、歪んでるものはないよ」と。

けれど私のように、思いっきり歪曲しているのもどうなんだろう。

うたっている彼の周りには、人が集まっていた。といっても六人程度で、そのうちの一人はかすみちゃんだ。彼女は遠目から見ても分かるくらいに、目を輝かせている。あんな近くからあんなキラキラした目で見られて、それでも彼女の気持ちに気付かないあの男の頭は一体どうなっているんだろう。

私は、彼から少し離れたベンチに一人で座っていた。「公園にうたいに行くから、一緒においでよ」と誘ってくれたのは彼には悪いけれど、観客に混ざって彼の歌を聴くのはなんだか気が引けた。――日曜日の爽やかな朝というのは、私には一番似合わない。

彼がときどき、こちらに目を向けてくるのが分かる。私はわざと、

視線を合わさないようにした。隼人が私の方に目を向けていることに、かすみちゃんも気づいていたから。

「――隼人の鈍感」

私は声を出さず、口だけ動かした。それを見ていた隼人が、うたいながら首をかしげる。私の言ったことまでは読み取れなかったらしい。

『彼は、あなたのことが好きですよ。そういう目をしてる』

あの日のかすみちゃんの言葉を、私は反芻する。あの子もあの子で、鈍い部分がある。

隼人は誰に対しても、優しい目をするのだ。私が特別だというわけではない。

嫌な言い方をすれば、きっと隼人は野良猫に対しても私に対しても、同じ目を向けるだろう。つまりはそういうことだ。

彼は私に対して、恋愛感情なんて持っていない。

隼人の作る曲は、全体的に明るい感じがする。テンポは少し早目で、疾走感がある。夏場によく見かけるアイスのCMみたいに、爽やかな感じ。それは彼の声にもよく合っていて、けれど何かが欠け

ていた。その欠けている物が何なのかは、私には分からない。……プロになるためには、恐らくそこが重要なのだろう。

彼の歌声も、曲も、私は好きだった。けれど、プロになるのは難しいだろうとも思う。

——隼人は、プロになりたいんだろうか。そういえば、聞いたことがない。

うたい終わった隼人は、「ありがとうございました」と言って丁寧に辞儀をした。その言葉を聞いて真っ先に、そして誰よりも熱心に拍手をしたのはやっぱりかすみちゃんだ。

……彼から少し距離のあるこのベンチで、一人で手を叩くのもおかしい。私は心の中で、こっそりと拍手をした。

ギターを片づけている彼に、かすみちゃんが何か話しかけているのが見える。かすみちゃんも彼も笑顔で、それがなんだか遠くに見えて、私は視線をそらした。なのに、

「さなー！」

彼に大声で名前を呼ばれてギョツとした。

けれど彼の方を見てみると、そこにはもう、かすみちゃんの姿はなかった。私はわざと緩慢に歩いて、かすみちゃんはどこに行ったのかとあたりを見回した。

「さな、何をきよろきよろしてるの？」

黒いケースに入れたギターを肩にかけながら、隼人が笑う。

「かすみちゃんは？」

「え？ もう帰っちゃったよ。受験生だから、勉強するって」

「……そう」

「彼女と何か話したかったの？ だったらもっと早く来ればよかったのに」

今度かすみちゃんに声をかけてみます、とマスターに言ったことを思い出しながら「話すことは特にないんだけど」と私は呟いた。隼人は不思議そうな顔をして、けれどもぽっと明るい顔をして笑った。彼はいつだって、切り替えが早い。

「俺の歌、聞こえてた？」

「うん」

つかの間の沈黙。彼が鼻の頭を掻いてるのを見て、何か感想を言うべきだと気付く。

「――私は好きだよ」

と言ってしまってから、慌てて「あんたの曲」と付け足した。

私の言葉を聞いた隼人は、かけっこで一等賞を取った子供みたい

に、
笑った。

隼人のライブを聴きに行った翌日は土砂降りで、モーニングの間が過ぎると、店内には私とマスターしかいなくなってしまった。つまり、お客様は一人もいない。

「今日は休業にした方がいいかしら」

マスターが窓の外を見てため息をついた。けれど、お客様がこなくて心底困っているという様子でもない。マスターは「こういう日があっても仕方がないわ」と、朗らかに笑った。

「だけど、せっかくなちゃんに来てもらったのに、なんだか悪いわねえ」

「いや、私は別に……」

そこまで言うてから、「なんなら今日はお店を閉めて、大掃除しちゃいます?」と提案してみた。どうせ、隼人の家に帰っても暇だ。彼はいま大学に行っているはずだし、今日はバイトもあるから帰りが遅くなると言っていた。

マスターは私の提案を聞いて、ぽんっと手を叩いた。

「それいいわね! そうしましょう。お掃除、一緒にやってくれる?」

「もちろんです」

マスターは「Welcome」と書いてあるプレートを掲げたダ

ルメシアンを店内にひっこめると、「本日臨時休業」の札を扉にひっつけた。

「隼人君にお願いして、今度店^{ウチ}でうたってもらおうかしら」

コーヒーマーカーを丹念に掃除しながらマスターがそう言ったので、私は「彼の歌を聴いたことがあるんですか？」と、マスターに尋ねた。マスターはもちろんよと言って、顔をあげた。

「彼の歌、青春って感じよね」

申し訳ないが、青春って感じがどんな感じなのかは分かりかねる。私は煤^{すす}けたダルメシアンを丁寧に拭きながら、彼の歌声を思い出していた。彼のあの独特の爽やかさが、青春って感じなのだろうか。

「……隼人って、プロになりたいんでしょうか」

本人に直接言えいい言葉を、私は何故かマスターに向かって投げかけていた。マスターは私の唐突な質問に目を見開き、――つまり、きよとんとした。肌が黒いせいかな、白目が目立つ。しばらくしてから、マスターは「ふふっ」と笑った。

「そういう話は、聞いたことないわね。でも多分、彼はプロになるうとは思ってない気がするわ」

「どうして、でしょうか」

私が尋ねると、マスターは頬に手を当て首をかしげた。

「んー。私は音楽に詳しくないからよく分かんないけど、彼の歌は誰か一人だけのためにうたわれてる感じがするのよね。万人向けじゃないというか。常に、誰か一人だけのことを考えてる。そこが、プロとか、プロを目指す人とは違う気がするわ」

そう言われてみれば、彼の音楽は常にメッセージが込められているような感じがする。そしてそれは、彼の周りを取り囲む観客には向けられていない。彼はどこか遠くに向かって、歌をうたっているようだった。——ああ。だから私は、

彼は、プロになれないような気がするんだ。

「さなちゃん、どうしたの？」

ダルメシアンを拭く手を止めて考え込んでいた私に、マスターが心配そうに声をかけてきた。マスターはコーヒーマーカーの手入れを終えたらしく、オーブンの掃除に取りかかっていた。

「あ、すみません。なんでもないです」

私は慌てて立ち上がるの勢いよく扉が開くのは同時で、私は驚きながらも後ろを振り返った。

「——……今日、休業なの？」

入ってきたのは、ずぶ濡れのかすみちゃんだ。肩の上にある黒髪

から、ぽたぽたと水滴が落ちている。けれど彼女はそんなことなんて気にもしていない様子で、マスターの方を睨んでいた。

マスターはちょびヒゲをいじりながら、「今日はお客様がこないから、大掃除することにしたのよ」と説明した。かすみちゃんは黙ったまま、店の奥へと歩き始める。奥には階段があり、店の二階はかすみちゃんとマスターの住居になっていた。

「かすみ、ちゃんとお風呂に入ってたまりなさいよ！ 風邪引いちゃうわ」

かすみちゃんは聞いているのかいないのか、一言も発することなく店の奥に消えた。

「……あの子、傘持ってたのかしら」

マスターは眉毛をハの字にして笑う。それから、床に点々と落ちていた水滴を見て「ごめんなさいね」と呟いた。床掃除は、私の役目だからだ。

「気にしないでください。これからモップがけするつもりでしたから、汚れていた方がやりがいあります」

我ながら訳の分からないフォローをすると、マスターが笑った。それから、

「さなちゃんは、反抗期とかあったのかしら？ お父さんって、やっぱ煙たかった？」

と、興味深そうに訊いてきた。私は硬直する。父親の顔も、声も、その影すらも、思い出したくなかった。

「――そうですね。現在^{いま}も反抗期継続中というか」

マスターと二人で笑ってから、沈黙した。空気が薄いように感じる。マスターはため息をつく、「こんなこと訊いたらさなちゃんも困ると思うんだけど」と前置きしてから、

「私みたいなお父さんって、やっぱり子供としては恥ずかしいのかしら」

と、ちょびヒゲをいじりながら呟くように言った。

「私ね、こんな感じだけど、中身は男なのよ。だから女の人のことを好きになるし、みのりと、——かすみの母親と結婚した。みのりが死んでしまってから、私はこの店を切り盛りしながら、一人でかすみのことを育ててきたのよ。けれどやっぱりなんていうか、かすみもお年頃になってきたら、段々と私のことを煙たがるようになってね。いや、分かっているのよ、思春期の女の子が父親を煙たがるってことは。でもやっぱりほら、私が『こんなの』でしょう？　そこを気にしてるんじゃないかって、考えちゃってねえ」

早口で捲^{まく}し立てていたマスターは、私の方に目をやって、「ごめん、愚痴っちゃった」と謝った。私は首を振る。『一般的な』娘と父親の関係がどんなものかなんて、私には想像しかできないけれど。

「……私は、マスターのことが好きですよ。多分かすみちゃんも、マスターとの距離をどう取ればいいのか分からないだと思います。マスターも、かすみちゃんにどの程度近づいていいのか、分からないかったりしません？」

そうなのよ、と頷くマスターを見て、私はほほ笑んだ。

「かすみちゃんもきつと、そうなんだと思います。本心から嫌っているわけじゃないはずです。じゃなきゃ、お店の手伝いなんてしませんよ」

そうだといいんだけど、とマスターはため息をついた。それから、

ちよびヒゲを触りながら笑った。

「ねえ、私ね。ちよつとでもダンディーになろうかと思って、ヒゲを伸ばしてたのよ。本当はヒゲを伸ばすの好きじゃないから、ちよつとだけ。で、このちよびヒゲ、ダンディーな男前に見えるかしら？」

そう訊かれて、私は思わず吹き出した。

ダンディーな男前。

マスターのちよびヒゲに、そんな意味が込められていたとは。

……しかし正直、

「ダンディーには見えません。でも、マスターのそれはもうトレンドマークになってますよ」

私が答えると、マスターは満足そうに頷いた。

模様替えではなくただの掃除だったので、店内はそこまで変わったようには感じない。けれど、掃除をした二人……つまり私とマスターは、大いに満足していた。

「きれいになったわね、店」

「そうですね」

誰も気づかないであろう、ピカピカに磨き上げられたサッシを見ながら、二人で笑った。

マスターが私の父親だったらよかったのに、と思うことがある。口調や仕草なんて、私には関係なかった。私は、マスターのことを好きになっていた。それは多分、男性としてではなく。

私はマスターに、父親を求めているのだと思う。

――やめて、と言えなかった。言っではいけないことのような気がした。

私のことを汚いもののように見ていた母の顔を、今でも鮮明に覚えてる。

あの頃の私は、『それ』が何なのか、よくわかっていなかった。

ただ、母に助けを求めようとしていたことも確かだ。

反転する世界。ただでさえやつれていた母親の顔色が、青白くなる瞬間。バサリと音を立てて崩れた荷物。そこから転がり落ちた真

っ赤な林檎は、酷く歪いびつな形をしていた。

「気持ち悪い」と、母は言った。
「どうして、」

——その続きは、思い出したくない。

大掃除の次の日も、喫茶店は臨時休業となった。私は彼の家の窓から、外を見る。豪雨と暴風で、前がほとんど見えない。そう、昨夜から台風が直撃していたのだ。

「隼人は今日、バイトあるの？」

私が振り向くと、ギターの調律をしていた彼は笑った。

「俺の働いてるところは、二十四時間営業のファミレスだからね。台風じゃ、休みにはならないよ」

「大学は休みだったのに」

ガタガタと音をたてる窓ガラスに、私は手を伸ばした。もちろん、窓を開けるつもりはない。ギターの調律をするのに、窓の音が邪魔なんじゃないかと思ったのだ。

風が向きを変えたのか、大粒の雨が一瞬だけ窓を強く叩いた。

「俺はもうすぐバイトに行くけど、さなはどうする？ 一緒に来る？」

「いい。家でコーヒーの勉強するから」

雨に濡れたくない私がそういうと、隼人はため息をついた。

「傘をさしても、ほとんど意味ないだろうなあ」

隼人はバイクも車も自転車も持っていない。どこかに行く時は常に徒歩だ。この雨じゃ、バイト先に辿り着くころにはずぶ濡れになっているだろう。隼人はため息をつきながら立ち上がると、ギターの壁に立てかけた。それからリュックにタオルを入れて、半透明の雨合羽あまがっぱを羽織った。

「てるてる坊主みたい」

私が笑うと、隼人は人差し指で鼻をかいだ。照れた時の、彼の癖だ。

「帰りは、晴れたらいいなあ」

隼人は笑いながらドアを開けた。冷たい風が部屋の中に勢い良く入りこんできて、テーブルの上に置いてあったマスターのメモがバサバサと音をたてた。

喫茶店で働き始めて二週間が経とうとしていた。常連さんの顔は覚え始めたし、「いつもの」という注文にも対応できるようになってきた。特に印象深い常連さんの「いつもの」メニューは、エスプレッソ三杯だ。それを、ミルクも砂糖も入れずに一気飲みする。あんな苦い飲み物をよく三杯も飲めるなど、いつも感心していた。マスターは店を閉めた後、コーヒーを一杯ご馳走してくれる。それも、毎日違う種類を。

「さなちゃんもせっかく喫茶店で働いてるんだから、いろんな味を覚えないとね！」

と言ってくれるものの、一杯百二十円の缶コーヒーとはわけが違
うので、いつも申し訳ないなと思っていた。

「……思ってるだけで、もらえるものはもううんだけどね」

私はマスターのメモを見ながら、一人で笑った。

隼人が出かけてから三時間後、台風は過ぎ去り、しとしとと降る
雨だけが残っていた。風がないとはいえ、雨の中を歩くのは憂鬱だ。
なのに私は、近くにあるスーパーに向かって早足で歩いていた。

トイレトペーパーが切れていたのだ。

隼人の性格からしてそういうものは買い置きしているはずなのに、
どこを探しても見当たらない。しばらく探して諦めた私は、ビニ
ル傘を手にとった。

透明のビニル傘は、雨粒が流れ落ちていく様子を見れるのが面
白い。その代わり、いかにも安物臭かった。

スーパーでトイレトペーパーと、ついでにお菓子を数点買うこ
とにした。この季節になるとさつまいもや栗を使ったお菓子が続々
と出てくる。それらに目のない私は、新商品をいくつかカゴに放り
込んで、レジへと向かった。

私の前で会計をしているお姉さんは、見切り商品ばかりを買い込んでいた。それも、やたらと甘いものが多い。菓子パン、コーンフレーク、大福、まんじゅう、プリン、チョコレート菓子、シュークリーム……。私はお姉さんの方にちらりと目をやった。人形のように細い脚を露出している彼女は、酷く疲れた顔をしていた。セットされているはずの巻き髪は、なぜか乱れているように見える。

——誰かに似ている、と考えかけて、やめた。

スーパーから出ると、私は安物のビニール傘をさして、隼人のマシヨンへと歩き出した。遠くの方で、雲の隙間から青空が顔を覗かせている。もうすぐ、雨はやむだろうか。

そんなことを考えていた私は、足を止めた。

高校生くらいの女の子が、道端に座り込んでいたのだ。傘もささずに。

体育座りをして膝に顔を埋めているせいで、表情は見えない。

具合が悪いのかと通りすがりの男の人が声をかけると、女の子はかすかに首を振った。男の人は首をかしげると、そのままどこかへ行ってしまった。

私は彼女に近づく。知らない人だったら、どうしようと思いがら。

「——かすみちゃん？　どうしたの」

傘を差し出しながら尋ねると、彼女が顔をあげた。

それはやっぱりかすみちゃんで、彼女は泣いていたのだと、何故か直感的に思った。

「風邪ひくよ？」

私はかすみちゃんが濡れないように傘を差し出すと、彼女は首を振った。

「いいんです、もう」

もう、の続きが「もう濡れているから」なのか、それとも他の単語が入るのか、私には分からなかった。かすみちゃんは立ち上がろうとせず、膝を抱えたまま地面にうずくまっている。喫茶店、つまりかすみちゃんの家は、ここからだとして少し遠い。

送っていくべきか、傘を貸すべきかと考えている私に、かすみちゃんは笑いながら訊いてきた。

「さなさんの家って、この近くなんですか？」

「……そうだけど」

私の家というよりも、あれは隼人の家だ。言い淀んだ私に、彼女は構わず尋ねてくる。

「行ってみたいんですけど、いいですか？」

「えっ？」

「……冗談ですよ、カマかけただけです」

かすみちゃんは口を歪ませて笑うと、立ち上がった。私よりも一回り小さいかすみちゃんは、子供のように見えなくもない。けれど、睨むようなその目つきは、子供のものではなかった。

「隼人さんと同居してるんですか」

「——ちよつと訳ありでね」

嘘をつくのが面倒になった私はあっさりと肯定した。嘘をついたところで、「さなさんの家に連れて行ってください」だのなんだのと追及されたらばれることだ。

今の私には、隼人の家以外に帰る場所がなかった。

この子は私のことを敵視しているんだろうか。私は、髪の毛が頬に張り付いている彼女の顔を見つめた。彼女は唇を噛んで、私の方を睨んでいる。細い目の奥が、ゆらゆらと揺れているように見えた。

「……喫茶店に帰った方がいいわ。本当に風邪ひくわよ」

九月も中旬になると、大分涼しくなっていた。雨が降った日は寒いくらいだ。私はかすみちゃんの薄いカーディガンを見た。薄い灰色だったはずのそれは、濡れたせいで重い色に変わり、彼女の身体にぴったりと密着している。

「……………」

私の言葉を聞いて俯いたかすみちゃんに、ぴんときた。

「家、帰りたくないの？」

なるべく柔らかい口調で尋ねてみても、彼女は口を開こうとしない。そんなかすみちゃんを見て、私は笑った。

「私に似てる」

「え？」

眉間にしわを寄せて顔をあげたかすみちゃんに、私はもう一度笑った。

「とにかく、その恰好じゃ寒いでしょ？　うちにおいでよ」

「うちって……」

「まあ、隼人の家だけど。今、隼人いないしさ。かすみちゃんを家にあげても、隼人は怒らないわよ」

私は話しかけながら、彼女の腕を掴んで引っ張った。
嫌がられるかと思ったけれど、かすみちゃんは何も言わなかった。

かすみちゃんを半ば強引にお風呂に入れてから、私は濡れている彼女の服を折り畳み、自分の服を引っ張りだした。この家にも洗濯機は一応あるが、乾燥機がない。びしょびしょの服をもう一度着ろというわけにもいかないだろう。

「着替え、カゴの中に入れておくからー」

風呂場に向かって叫ぶものの、返事がない。一瞬不安になったが、シャワーの音が聞こえてきた。……本当に私とそっくりだな。私はため息をついて、脱衣所から出た。

スーパーで買ってきたお菓子を開封して、お皿に並べていく。飲み物は麦茶しかなかったので、それを注いだ。

これがジュースとかコーヒーだったら、本格的なお菓子パーティーみたいだったのに。

そんなことを考えていたら、かすみちゃんがお風呂から出てきた。思ったよりも早い。

脱衣所から出てきた彼女が、素直に替えの服を着てくれているのにはホッとしたけれど、髪の毛は若干湿っているように見えた。

「……髪、ちゃんと乾かした？」

「乾かしました」

「うそ」

頭に触れようとすると、彼女はふいっとそっぽを向いた。私は苦笑する。

「別に襲ったりしないわよ。そういう趣味はないし。……需要があるなら『する』けど？」

「分かってます、結構です」

かあっと顔を赤くした彼女を見て、私は目を細めた。若いっていいなあ、と思ってしまう。……自分も若いはずなのに。

「ま、座りなよ。そこにあるお菓子も適当に食べて。麦茶もどうぞ」

私は笑いながら、脱衣所にドライヤーを取りに行く。リビングに戻ると、彼女は道端にいた時と同じように体育座りをして、膝に顔をうずめていた。

——似ているけれど、決定的に違うのは。

私は彼女の頭をそっと撫でた。思った通り冷たくて、そして震えていた。

子供のころ、雨が好きだった。

わざと傘を忘れて出かけて、ずぶ濡れになっていた。

濡れるのが好きだったわけじゃない。

濡れた髪の毛は冷たくて、身体に張り付く服の感触はとても不快だった。

ならどうして、私は傘もささずに外を歩いていたのか。

私はドライヤーのスイッチを入れて、かすみちゃんの髪を乾かし始めた。

彼女は何も言わないし、顔をあげようもしない。

——きつと、声も出したくないのだろう。

「……私ね。子供のころ、雨の日に傘をささずに歩くのが好きだったんだ。なんでだと思う？」

ドライヤーの音に負けないように、私はかすみちゃんに話しかける。かすみちゃんは、やっぱり答えようとしなない。彼女にとって、今一番触れてほしくない話題なのかもしれない。

「——濡れてたらさ、泣いててもばれないでしょ？ だから」

私は勝手に答えを教えると、ドライヤーのスイッチを切った。洗面所に戻しに行くのが面倒で、床にそのまま放置する。それから、彼女の前にあるさつまいもチップスを手に取って食べた。

「かすみちゃん。なにかあった？」

もしかしたら、普通はこんなに単刀直入に尋ねたりしないのかもしれない。私は、人と付き合うのがうまくなかった。他人と身体を重ねた回数が多いだけで、誰かと寄り添って生きてきたわけではないから。

雨音しか聞こえない時間が続いて、私はようやくそのことに気付いた。

「――あ。答えたくないなら、答えなくても」

「お父さんと喧嘩しました」

答えなくてもいいよと私が言う前に、かすみちゃんが口を開いた。早口で、強気にも聞こえるその口調は、どこか痛々しかった。

「喧嘩したというか、私が一方的に怒鳴って家を出てきました」

かすみちゃんのお父さんと言えどもちろん、マスターのことだ。私は首をかしげる。マスターが、かすみちゃんを怒らせるようなことをしたんだろうか。

「……お父さんは怒らないんです、いつも。だからなんか、無性に腹が立って――」

声が震えているのは、怒っているからじゃないんだろう。私はか

すみちゃんの、線の細い背中を見た。

「最低なのは、私の方なんです。……いつからだったのかは分からないけど、私はお父さんのことを恥ずかしいと思うようになってました。授業参観にも来ないでって言いました。なよなよしてて恥ずかしいからって、そこまで言ったんです。なのお父さん、その時も何も言わなくて、悲しそうに笑ってるだけで」

先ほどまでとは対照的に饒舌になったかすみちゃんは、ぼろぼろと言葉をこぼした。それは明らかに彼女の本音で、

「……本当は知ってるんです。お父さんは、すごくいい人なんだって」

間違いなく、彼女の本心だった。

「人目ばかり気にして、……なよなよしてるのは、私の方なんです。父の方がよっぽど強い。なのに、どうしても受け入れられなかった。小さいころ、父について少しからかわれて。たたそれだけなのに。父は何も悪くないのに」

「……タイミングいいわね」

「え?」

不思議そうな声を出すかすみちゃんの背中に、私は笑いかける。まさかつい最近、マスターとも似たような話をしたとは言えない。

但至少し安心した。知ってはいたけれど、確認できたから。
結局、かすみちゃんもマスターも、

「お互いのことが好きなんじゃない」

「え？」

かすみちゃんが怪訝な顔をしてこちらを振りかえる。私は自分の服の袖を引っ張って、かすみちゃんの頬に残っていた涙の跡を拭いた。

「マスターは怒らないって言ったけど、叱るべき時は叱る人でしょう。感情的にならない、っていうのかな。私はマスターのそういうところが好きなんだけど。……かすみちゃん、今日はどうしてマスターに怒ったの？」

「……進路のことです。お父さん、本当に何も言わないから。私のことなんて本当はどうでもいいんでしょって、思わず言っちゃって……」

「思わず言っちゃったってことは、マスターが本当はそんなこと考えてないって、知ってるんだ？」

正直、中卒の私は進路について揉める家族の話はよく分からない。けれど多分、マスターはかすみちゃんのことをどうでもいいとは思っていない。多分というか、絶対。じゃなきゃ、私にあんな話をしてくれないはずだから。

「マスターも悩んでるんじゃないかな。かすみちゃん、思春期の女の子だしさ。……進路のことは多分、余計な口出しをして、かすみ

ちゃんが混乱するのを怖がってるんじゃないかな。私はそう思う」

こちらを見ていたかすみちゃんが、ほんの少しだけ笑う。

この日から少しだけ、彼女との間の空気が変わった。

……確かに、遊園地に行きたいなんて話を振ったのは私だ。けれど、

「あらあ、じゃあ皆で行かない！？ かすみも、受験勉強の息抜きが必要だと思うのよ！ さなちゃんも隼人君とデートしたいでしょ！？ ね！！！」

こんな話の流れになるとは、思っていなかった。

話は数分前^{さかのぼ}に遡る。

私は店内の掃除をしながら、十月に入ってからずいぶん涼しくなりましたねと、マスターと話していた。ちなみにその時は閉店後で、お客は誰もいなかった。

どこかに出かけるにはちょうどいい気候よね、とマスターが笑ったので、遊園地にも行きたいですねと、軽い気持ちで返した。そう、本当に軽い気持ちで。

「ダブルデートみたいなの！ どう！！！」

そう、こんな返事が来るとは思ってもみなかったのだ。

隼人もだが、マスターも鈍い。かすみちゃんは隼人のことが好きで、私を敵対視してるんだって、どうして気付いてくれないのだろう。……まあ、最近少しだけ、かすみちゃんとは仲良くなっていた

けれど。

あの、雨の日以来。

「いやあ、どうでしょう……」

曖昧な返事をしてみたものの、思った以上にマスターは食い下がってきた。今ならハロウインの限定アイテムがどうのこうの、スイーツがどうのこうの。私は適当に相槌を打ちながらも、マスターは『かすみちゃんと』出かけたんだということに薄々気づいていた。そして、二人だけで出かけるのが不安なんだってことも。……しかし、

「隼人の都合もありますし……」

隼人とかすみちゃんと、私。3人揃って遊園地だなんて、修羅場にもほどがあるわ。私は内心で突っ込みながら、マスターの誘いを回避した。つもりだった。

「私も、四人で遊園地に行きたい」

店の奥から、かすみちゃんがそう言ってくるまでは。

隼人もノリノリで誘いに乗ってきて、結局浮かない顔をしているのは私一人だけだった。ああ、どうしてこんなことになってしまったんだろう。

マスターは喫茶店を臨時休業にして、隼人は大学を休んで、かすみちゃんは文化祭をさぼってまで、遊園地に来た。

皆そこまでして遊園地に行きたかったのかと突っ込みたいけれど、遊園地という単語を最初に出したのは私なので文句は言えない。

かすみちゃんとマスターは、若干距離をあけて歩いている。私と隼人も、若干距離があいている。というかもう、それぞれの間に距離があった。これじゃ、なんのために四人で遊園地に来たのかも分からない。

「……ね、何か乗りましょうよ！」

気まずさを緩和するためか、やたらと陽気な声でマスターが提案する。隼人は相変わらずのんびりした口調で「いいですねー」と賛同した。……多分、このメンバーの中で唯一気まずさを感じていない人間だろう。

「で、何に乗るの？」

かすみちゃんのとがった口調に、みんなで沈黙する。別に、彼女が不機嫌なのだというわけではない。とがった口調は彼女の特徴で、それは皆知っていた。

黙ったのは、「何に乗るか」を決めていなかったからだった。

海賊気分になれるバイキングは男のロマンよ!!　なんてことを
言いだしたのはマスターで、そうですねと答えたのは隼人だった。

拒否したのはかすみちゃん。酔うから乗りたくない、というのが
彼女の意見だった。私はバイキングという乗り物に乗ったことがな
いから、酔うのかどうかは分からないけれど、正直あまり興味もな
かった。

結局、隼人とマスターがバイキングへ、私とかすみちゃんはそ
そばにあるベンチに腰掛けた。餌をもらえると期待したのか、足元
に鳩が次々と寄ってくる。あいにく、ポップコーンやスナック菓子
は持っていなかった。

妙な組み合わせになったと思う。これならまだ、マスターと私、
隼人とかすみちゃんの組み合わせの方がよかったんじゃないか。…
鈍感組は、そんなこと気付いてもいないだろうけど。というかマ
スターは、かすみちゃんと遊びに来たかったんじゃないのか。
どれだけロマンチックなんだ、そのバイキングとやらは。

「……この前のこと、ですけど」

いきなりかすみちゃんに話しかけられた私は、必要以上に大きく
反応した。私の動きに驚いた鳩が、バサバサと音をたてて飛び立っ
ていく。その様子を見てから、私はかすみちゃんの方に目をやった。
彼女はバイキングの方を見ている。

「……この前のって？」

「雨の日の」

「――ああ」

どう反応すればいいのか分からなくなって、私は黙った。あれから、たまに話したりする程度には仲良くなっていたけれど、その日のことについてはお互い触れようとしていなかったのに。

「お父さんと話しあったんです。ちゃんと」

「え？」

予想外の言葉に、私は目を丸くした。てっきり、いまだに気まぐれいままなのだと思っていた。だからこそマスターも、遊園地に誘ってきたのだと思っていたのに。

「進路のことも言いましたし、……お父さんと仲良くしたいとも、伝えました」

「ああ」

だからか。マスターが張り切っていたのは気まずさを解消するためではなくて、距離感を縮めるためなのか。妙に納得して、私は頷いた。

「……さなさんには、感謝してます。あの時は、ありがとうございました」

彼女の言葉とともに、船の形をしたアトラクションがゆっくりと動き始めた。

ちょっと待っててください、とだけ言い残してどこかへ行ってしまったかすみちゃんは、カボチャのマフィンを両手に持って戻ってきた。ハロウィン仕様なのか、カップの色はやたらと派手な紫色だ。彼女は無言で、私の方にマフィンをひとつ差し出してきた。

「さなさん、そういうの好きですよね」

「え？ ハロウィンはそんなに興味ないけど」

「違います。カボチャとかさつまいもとか、そういうのが好きですねって意味ですよ」

かすみちゃんの言葉を聞いて、苦笑した。そういえばあの雨の日、カボチャやさつまいものお菓子を並べて出したのは私だった。結局あの後、二人で半分ずつ食べたけれど。

「そうね。ありがとう」

私はマフィンを受け取って食べ始める。かすみちゃんも同じものを食べ始めて、しばらく無言になった。私たちが物を食べ始めたことに気付いた鳩が、再び近づいてくる。……残念だけど、このマフィンをあげる気はない。

「――……かすみちゃんはさ、どうして隼人のことが好きなの？」

マフィンを食べながら、気になっていた疑問をぶつけてみる。隼人もマスターもいない今なら、答えてくれる気がした。なんだかん

だいて、彼女は素直でもあったから。

「……君が笑ってくれるから、僕は歌うんだ。君の姿が見えなくても、ずっと、ずっと。僕は今日も歌い続ける。この声が、いつか君に届けば、それでいい」

彼女は詩を朗読するようにそれを呟いた。

大きく揺れ始めたバイキングから、叫ぶような声が聞こえてくる。

「お父さんのことで悩んだ時に、公園で隼人さんと出会ったんです。出会ったというか、うたっているところを目撃したというか。——隼人さんの歌詞はいつも真っ直ぐで誰かのことを想っていて、素敵だなあと思いました。私もあんな風になりたいと思った。それで意を決して話しかけてみたら、隼人さん自身も真っ直ぐな人で、それが始まりでした」

やっぱり彼女は素直だと思う。私だったら多分、同じ質問をされてもはぐらかすだけで答えなかったはずだ。

彼女はマフィンを食べ終わると、油を吸ってしっとりとしている薄い紙カップを丁寧に折り畳んだ。それから、

「——あの歌詞に出てくる『君』のことを隼人さんは想ってるんだろうなって、出会った時から気付いていました。もちろん、その『君』が、私じゃないことも。……それでもいいと思いました。私は、彼のことが好き。それでいいんです」

そう言って、ベンチの隣にあったゴミ箱に、折り畳んだそれを捨てた。私は最後の一口を食べ終わると、ゴミをぐしゃぐしゃに丸めた。

ハンバーガーの包み紙なんかでもそうだけど、食後に綺麗に折り畳むタイプと、ぐしゃぐしゃに丸めるタイプの人間がいる。恐らくかすみちゃんは、ハンバーガーを食べた後も綺麗に折り畳むだろう。私はもちろん、丸めてしまうタイプだ。

私と彼女は何かがそっくりで、なのに正反対だった。

「――前にも言ったけど」

私は、首を前後にふりながら足元をうろろしている鳩を見て言った。

「彼が誰のことを好きなのかは、彼にしか分からないわよ。……隼人に、好きな人がいるかどうか聞いたことある？」

かすみちゃんが首を振るのを確認してから、私も聞いたことがないけど、と付け足した。

「その歌の『君』も、実在していない人物かもしれない。歌の中だけの、抽象的な存在なのかもしれないわ」

「そうでしょうか」

そうだといいなという期待は、一切こめられていない口調だった。私はかすみちゃんの方を見る。かすみちゃんは、射抜くような目で私の顔を見ていた。

「さなさんは、そう思ってるんですか？」

「……思ってるけど」

「そうですか」

彼女は私から目線をそらすと、大きく揺れるバイキングを見た。それから、笑った。

「今日は父が無理を言ってすみませんでした。さなさん、困ったでしょう？ この四人で、遊園地だなんて」

言い当てられて押し黙った私に、かすみちゃんは笑いながら続ける。

「お父さんの提案を聞いて、私も遊園地に行きたいと後押ししたのは、わざとです。こうやってさなさんとお話する機会がほしいと思ったのと、……ちょっと困らせてあげたいなーと思って」

——本当に素直だな。私はある意味感心しながら、彼女の告白を聞いていた。

「……父は鈍感ですね。隼人さんも」

バイキングを見ていたかすみちゃんが、再びこちらに視線を戻す。

「だけど、さなさんも案外鈍感なのかもしれませんね。――あるいは」

彼女の笑顔には悪意がないのに、どこか怖いものがあつた。

「気付いてないふりをしている、のか」

笑っている彼女とは対照的に、私は無表情のまま、黙っていることしかできなかった。

明らかに顔色が悪い。私はそう思いながら、目の前を通り過ぎる茶髪の男の子を見ていた。男の子といっても、私と同じ年くらいか、あるいは少し年下くらいだろう。

「相変わらず乗り物に弱いな。乗らなきゃいいのに」

そばにいた黒髪の男の子が、茶髪の彼に声をかける。彼らは、私たちの近くにあるベンチに腰掛けた。

顔色の悪い男の子はため息をつく、吐き捨てるように言った。

「うるせーなー。来年受験生になるんだから、今のうちに遊んでおきたいんだよ」

あ。この子たち、私よりも年下か。そんなことを考えていたら、同級生らしき女の子たちが、彼らのもとに近づいてきた。一人は、白くて大きなぬいぐるみを腕に抱えている赤茶髪の女の子。もう一人は、かなり華奢な黒髪の子だった。

「おいおい。また、でっかいヌイグルミを取ったのかよ」

呆れたような口調でそう言いながら、顔色の悪い男の子がぬいぐるみをわしゃわしゃとなでまわす。黒髪の男の子はその様子を見ながら、腕を組んでしばらく考えた後、

「すまん。これ、なんていう動物だったっけ？」

「アルパカ」

華奢な女の子が、ぶっきらぼうに答えた。

「一年半前も、同じ質問してたじゃない」

赤茶髪の女の子が突っ込んで、皆で笑う。

四人はしばらく談笑してから、どこかへ行ってしまった。

楽しそうだな。

そんなことを、ぼんやりと思った。

「私！ バイキングから、さなちゃんとかすみに手を振ってたのよ！
気づいてた!？」

うきうきした声でマスターにそう言われて、閉口した。残念ながら私はその時、近くにいた高校生たちを観察していて、バイキングの方なんて見ていなかった。大体、

「見えないよ。ここから見たら、乗客なんて米粒みたいな大きさなの」

私が思っていたことを、かすみちゃんがすっぱりと言いきって、マスターと隼人は苦笑した。

「なんだかんだでさー。チョビさんとかすみちゃんって、仲いいね」

二人の後ろを歩きながら、隼人が呟くようにそう言った。彼は、子供を見守る保護者のような優しい目をしていた。

「親子って感じがしてるし。園内こちでも浮いてないよ」

「そうね」

私は笑いながら、目の前で喧嘩しつつも笑い合っている二人を眺めた。初めて会ったころに比べれば、雰囲気が良くなった気がする。なんだかんだで、かすみちゃんも優しい子なんだ。……初対面の時は、性格がきつそうだとは思ってしまったけれども。

「俺達はさー、はたから見たらカップルに見えてるかな」

隼人がそんなことを言って、私は立ち止まった。

低く唸るようなジェットコースターの音と甲高い悲鳴が、頭上を通り過ぎていく。

「……見えてないんじゃない？」

年齢だけなら、カップルに見えるかもしれない。けれど。

「私、園内こちで浮いちゃってるから」

自嘲気味に笑うと、隼人が一瞬だけ悲しい顔をした。どうしてそんなこと言うんだ、と言わんばかりの顔をしている。

——そうだね。隼人は、知らないから。

「こういう場所は、私には似合わないのよ」

小さな子が、風車かざぐるまを持って向こうから走ってきた。楽しそうに笑っている。カラカラと音をたてながら、風車は回る。その子が走っている間は。

立ち止まる。風車が止まる。振り返る。親がいることを確認して、笑う。再び走り出す。風車が、回りだす。

その一連の動作を見ながら、私は笑った。

「ほんと、似合わない」

「……じゃ、俺と君は、周りからはどんな風に見えてると思う？」

隼人は何が聞きたいんだろう。

……知らない。分からない。どうでもいい。

私は大して考えもせずに、思ったことを口にした。

「人間と化け物にでも、見えてるんじゃないの？」

彼の瞳が暗くなるのが、遠目からでも分かった。

小さな子どもが、こちらに向かって走ってくるのが見える。よたよたとした、おぼつかない足取り。二歳くらいだろうか。屈託のない笑顔をこちらに向けている。

ああ。あれ、昔の私だ。

『現在の私』は、『過去の私』がこちらに向かって走ってくるのを見つめる。彼女の後ろで、大きな影がゆっくりと動くのが見えた。

「早苗」

大きな影が私の名前を呼んで、小さな私は振り返る。笑顔で、手を振る。

彼女はまだ、人を疑うということを知らない。

彼女はまだ、壊されてはいない。

彼女はまだ、汚れて、いない。

小さな私が、こちらにやってくる。その笑顔には、影も迷いも嘘もなかった。

——今なら、まだ。

私は笑って、彼女に手を差し伸べる。そして、何の疑いもなく近寄ってきた彼女の細い首に、ゆっくりと手をかけた。

小さな首を絞めるのに、両手は必要なかった。温かな彼女の首に自分の冷たい手を、指を、喰い込ませる。少しだけ漏れる、苦しもうなうめき声。けれど。

——今ならまだ、幸せだから。

壊れる前に。

汚れる前に。

苦しむ前に。

ちゃんと笑えている今のうちに死ねたら。

その方が、幸せ、だから。

「……さな」

滲んだ世界が、徐々に輪郭を取り戻す。それと並行して、私の頭

が動き始めた。

真っ先に見えたのは隼人の心配そうな顔と、無機質な感じのする白い天井だった。朝の陽ざしと、鳥のさえずり。澄んだ空気。冷たい頬。パンの焼ける匂い。

私が掴んでいたのは、小さな自分の首わたしではなくて、隼人の手首だった。

「――……おは」

よう、と言い切る前に、隼人があいている手で私の頬をぬぐった。頬が冷たいのは乾燥した空気のせいではなくて、私が泣いていたからだった。

――最悪だ。

私は掴んでいた手首をさっとはなすと、枕に顔を押しあてた。空は嫌がらせのように晴れ渡っていて、雨が降る兆しもない。私が枕から顔を上げられるのはもう少し先になりそうで、だから隼人には早く向こうに行って欲しかった。

隼人はしばらく無言で私の隣に座っていたものの、

「朝ごはん、食べる？」

いつもよりも少しだけ小さな声で、そう訊いてきた。

「……………あとで」

枕に声を吸収されながらも私が答えると、隼人は私の頭をくしやりと撫でてから、キッチンへと向かった。気配がした。

遊園地に行ったせいか、子供のころの夢を見た。

大きな影。大きな手。笑い声。あの人の、目つき。
小さな、私。

あの夢が本当なら、——もしも本当に過去に行けるのなら、

私は躊躇^{ためら}わずに、自分を絞め殺すだろう。あの夢のように。

二度寝してしまったらしい。気づけばもう昼前で、隼人は大学に行ったらしかった。

洗面所に向かって、自分の顔を確認する。腫れた瞼を見て、今日はバイトが休みであったことに感謝した。

外に出かける用事はないけれど、寝癖は直しておくことにする。ドライヤーからの温かい風を受けながら、私の頭を撫でた隼人の手の温かさを思い出した。

彼は、優しい。
だから、辛い。

寝癖を直すと、テーブルの上に置かれている朝食をもそもそと食べ始めた。温めるのすら億劫で、冷たい目玉焼きを頬張る。

きつね色のパン。カリカリに焼いたベーコン。半熟の目玉焼き。

どこにでもありそうなこの朝食は、ここにしかない。

ここにしかない朝食を、私はあと何回食べられるのだろうかと思ったり思った。

十一月にもなると、さすがに薄着では寒い。私は喫茶店のバイト代で安い冬服を買い揃えつつ、隼人の家に居座っていた。

彼の家に住み始めて、かれこれ二カ月が経つ。彼は出ていけとも言わないし、かといって恋人になったというわけでもなく、『何故か同居している元同級生』という、おかしい関係が出来上がっていた。

喫茶店の売り上げも相変わらずで、特別忙しくなることもなく、のんびりとした時間を過ごすことも多かった。そんな時はマスターとたわいもない話をしたり、ひたすら店内を掃除した。

休日には隼人と出かけたり、彼と一緒に歌をうたってみたりした。私はうたうのが得意というわけでもないのですが、彼の歌声に合わせてぼそぼそと呟く程度だったけれど、それでも楽しかった。

たまに、かすみちゃんと二人で遊びに行ったりもした。

平和だった。

何もかもがうまくいっているような、そんな気さえした。

居心地の良い、安定した場所。

私はきつと、それが崩れるのが怖かった。

その日のバイトも無事に終わり、マスターにあいさつしてから外に出た私は、かすみちゃんが電柱にもたれかかっているのを見つけ

た。見つけられた、と言い換えてもいい。彼女は、私のことを待っていたんだ。

赤く充血した、目で。

「……どうしたの？」

いろんな意味を込めて、彼女に尋ねた。

なぜ私を待っていたのか。

なぜ泣き腫らした目をしているのか。

なにが、あったのか。

「――隼人さんに告白して、ふられました」

彼女はその中から、一番重要な答えを選びだして、口にした。

夏ならまだ薄暗かったはずの十八時。けれど今はもう、あたりはすっかり暗くなっていた。冷たい風が通り過ぎて、かすみちゃんの短い髪を揺らす。彼女は片手で前髪を押さえながら、――目を隠しながら、笑った。

「告白して、ふられて。なんていうか、ようやく落ち着きました」

「……どうということ？」

「私、家から離れようと思ってるんです。遠くの大学に行こうと思
って」

彼女はそう言うと、鼻をすすった。寒いのか、泣いているのか、
私には分からない。

「それで遠くに行く前に、私の気持ちを伝えておきたかったんです。
案の定、ふられちゃいましたけど。いいんです。……最初に言いま
したよね。彼が誰のことを好きであっても、私はあの人のことが好
きなんだって。それでいいんです。——彼が幸せなら、それでいい」

彼女は早口でまくしたてるようにそう言うと、ため息をついた。
ため息とともに、透明な雫が零れおちる。

『彼が誰のことを好きであっても、私は、彼のことが好きです』

あの言葉を初めて聞いた時、私はてっきり、彼女は気の強い子な
のだと思っていた。私のことを敵対視して、そう言っているのだと
けれど実際はそうじゃなくて、ただ本当に、隼人のことが好きだと
言っていただけだったんだ。

——彼女のことを敵対視していたのは、私の方だ。

「……隼人は、なんて？」

思わず訊いてしまってから、しまったと思う。どんな風にふられたの、と訊いたようなものだ。無神経にもほどがある。

なのにかすみちゃんは、私に向かって笑いかけた。

その笑顔に、悪意なんてものは微塵もなくて、

「それは、さなさんが隼人さんから直接聞いてください」

彼女のこの言葉は、答えを言ったようなものだった。

私が一番恐れているのは、現在が崩れてしまうことだった。

喫茶店でのんびりと働いて。

かすみちゃんと遊びに行って。

隼人と、歌をうたって。

そんな生活がいつまでも続くはずがないなんてこと、初めから、知ってた。

たとえば、『塚本早苗』^{わたし}のことを、マスターが知ってしまったら。
かすみちゃんが知ってしまったら。
隼人が、知ってしまったら。

きっと、もう二度と。

この温かな場所には戻れないんだって、知ってた。

帰宅すると、ぼんやりと天井を見ている隼人の姿が見えた。その様子は明らかに元気がなくて、……何も知らなければ、「どうしたの？」と訊いていただろう。

「――ただいま」

私が声をかけると、隼人はこちらに目を向けた。その目は、泣いていなかった。

「……おかえり」

いつものように笑えていない。けれど、その理由は訊きたくなかった。

後悔するときがある。

これまでの自分に。

隼人と出会ったことに。

イライラする。

胸を張って、彼の側にいることができない自分自身に。

2

過去は消えない。

どれだけ消そうと努力したって、消えることはない。

自分の中から消えてしまっても、その事実は消えない。

未来は消える。

恐ろしいくらい簡単に、消える。

手放すだけでいいんだ。自分を。

それだけで、未来は消える。

隼人との件で、かすみちゃんと仲が悪くなるということとはなかった。彼女は今まで通り、私と仲良くしてくれた。といっても、受験生だからあまり遊べないけれど。

隼人と私の関係も変わらなかった。私から何か言うことも、彼から何か言ってくることもない。今までと同じ、——そう思ったかった。

クリスマスについて言いだしたのは隼人の方だった。彼は、スーパーやコンビニから貰ってきたらしいクリスマスケーキのカタログを見ながら、「ケーキの種類はどれがいい？」と訊いてきた。

つまり彼の話は、クリスマスになってもまだ私がこの家にいるのが前提だった。

私は横目で、壁にかかっているカレンダーを確認する。クリスマスまで、まだ一カ月以上あった。

「気が早いんじゃない？」

私が苦笑すると、「おいしいケーキは早く予約しないと売り切れちゃうんだよ」と言っ、隼人は笑った。

「隼人の好きなものを注文すればいいよ」

私がそう答えると、彼は腕を組んで考え始めた。……そこまで真剣に考えるようなことなのだろうか。私は、おもちゃを真剣に選ぶ子供のような彼を見ながら、目を細めた。隼人は後でまた考えると言っ、カタログを閉じると、

「――あと、さ。正月なんだけど」

頭を掻きながら、ゆっくりと顔をあげた。

「俺、正月は実家に帰るって約束してあるんだけど。……さなも一緒に」

「帰らないわよ」

ぶっきらぼうに答える私を見て、彼は目を伏せた。同級生だったということとは、彼の家と私の家は近いのかもしれない。

だったらなおさら、その土地には行きたくない。

「……一人で留守番になるけど、それでもいい？」

この言葉に、私は目を丸くする。つまり彼の話は、正月になってもまだ、私がこの家にいるのが前提だった。

「――私はそれでいいよ。隼人がいいならね」

「留守番してくれるなら、それはそれでありがたいよ」

隼人は困ったように笑ってから、もう一度ケーキのカタログを開いた。

彼はやっぱり知らないんだ。
過去の私を、知らないんだ。

『――……気持ち悪い』

あの人の声が、頭の中に響いた。

「お正月はこの店も休みにするから。さなちゃんもゆっくり休んでね！」

陽気な声でマスターにそう言われて、呆然とした。昨日の今日、

このタイミングでまた正月の話が出るとは思ってた。けれど十一月にもなれば皆、正月のことを考えるのかもしれない。……帰る家が、あるのなら。

「クリスマスは、どうするんですか？」

正月から話を逸らすために質問してみると、マスターはいたずらっぽい笑みを浮かべた。

「営業はするけど、さなちゃんはお休みよ。イブも休み」

「え、なんで」

「仕事よりもデート優先に決まってるでしょう!？」

そんな、世の中の常識みたいに言われるとは。

残念ながら私は、誰かと『付き合った』ことがない。……恋人同士にとって、クリスマスってそんなに大事なイベントなのか。

なんだか宇宙人になった気分、私は目を輝かせているマスターのヒゲを眺めた。

子供が、サンタクロースの「正体」に気付くのは、いつなのだろうか。

サンタさんなんていないんだよ。お父さんとかお母さんが、サンタさんなんだよ。

小学校高学年にもなると、ほとんどの子が何故か『自慢げ』にそう語った。……サンタの「正体」に気付いた自分が大人びているような気がして、誇らしかったんだろう。

だけどあの時はまだ、サンタの「本当の正体」に気付いていない。

喫茶店からの帰り道。凍った空気と、冷たい街灯。人気のない道路。

ふいに掴まれた、腕。

後ろにひっぱられ、私はよろけつつも振り返る。背後に立っていたのは、私の腕を掴んでいたのは、

「――……あ」

見覚えのある、顔で。

私が言葉を発する前に、視界がぶれた。力が抜けて、その場にひざまずく。

顔を殴られたのだと理解するまでの数秒間、その人は「どうして約束の日に来なかったんだ」と呟き続けていた。

かつて、肉体だけで結ばれていた関係。

二週間に一度だけ会う、『七三分けの常連客』。

そうだ私は。この人の名前も、知らなかった。

乱暴に腕を掴まれ、立ち上がる。引っ張られる。引きずられるように、ホテルの中に入る。

その一連の流れを、私は他人事のように呆然と見ていた。

サンタクロースの正体は親で。

——けれど、その正体^{なか}には、親の愛情が詰まってる。

それに気付くのは、いつなんだろう。

私のもとにサンタクロースは来ないんだって気付いたのは、いつだったんだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2856y/>

その歌を

2011年11月29日11時55分発行